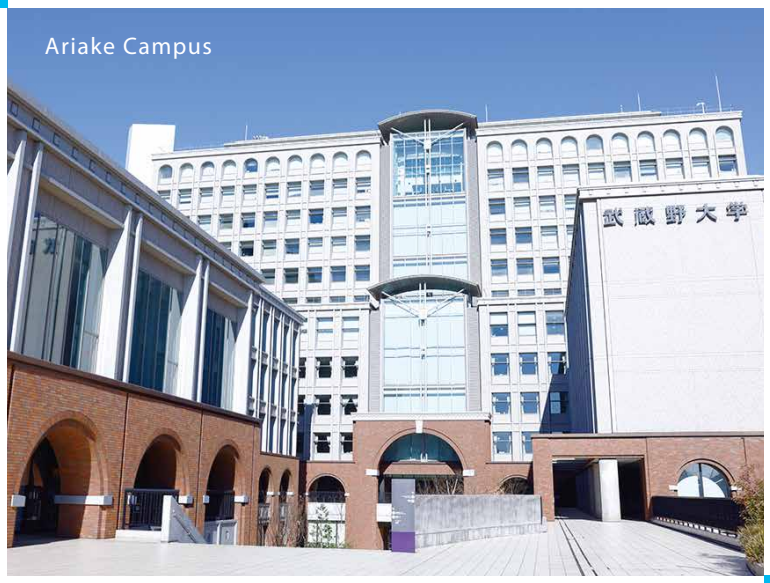
世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World

Musashino University
武蔵野大学

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

武蔵野大学は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

SDGs活動白書
2019-2024



はじめに

学長巻頭言 ―― 01
本書の刊行にあたって ―― 02

1 武蔵野大学SDGs実行宣言

1-1 武蔵野大学SDGs実行宣言（全学版）の制定について ―― 03
1-2 SDGs特設サイトの開設 ―― 04
1-3 各学部等における「SDGs実行宣言」の策定と成果 ―― 05

2 SDGs科目

2-1 「SDGs科目」の開設 ―― 22
2-2 「SDGs基礎」「SDGs発展」「SDGs特講」 ―― 22
2-3 「SDGsの基礎 ～みずから学ぶ世界の課題」発刊について ―― 24

3 MU SDGs Best Teacher Award ―― 25

4 SDGsに関する教育の実践例 ―― 27

5 Musashino SDGs Award ―― 54

6 SDGsをテーマとするフィールド・スタディーズ（FS）

6-1 フィールド・スタディーズ実践例 ―― 58
6-2 2024年度 フィールド・スタディーズ一覧 ―― 65
6-3 武蔵野大学学外学修アワード ―― 71

7 武蔵野大学しあわせ研究所 ―― 73

おわりに ―― 76

学長巻頭言

武蔵野大学は、1924年、関東大震災の翌年、深い悲しみ苦しみのなかに、小さな光を灯すように、東京築地本願寺で産声を上げました。

「生きとし生けるものが幸せになるために」という仏教の根源的願いは、2024年に創立100周年を迎える武蔵野大学の生命線として脈々と受け継がれてきました。その願いを今日的に具現化するため、2016年、「世界の幸せをカタチにする。」をブランドステートメントとして宣言。「しあわせ研究所」を設立し、SDGsの活動にも積極的に取り組んできました。

このブランド宣言の根底には、「世界は、幸せか。」という問いがあります。誰もが命をおびやかされず、平和に過ごせる世界、生きているものすべてがよりよくつながる世界にできないだろうか。このような問いに真摯に向き合い、課題解決にチャレンジし、世界の幸せの響創者として歩んでいくことを武蔵野大学は目指していますが、これはSDGsの「誰一人取り残さない」という基本理念と軌を一にしています。

武蔵野大学では、2019年に「武蔵野大学SDGs実行宣言」を発表し、しあわせ研究所を中心とした全学的なSDGsの活動のほか、本紙に掲載の通り、各学部・大学院・研究所がSDGsに軸をおいた教育研究活動を推進、展開しています。

2021年からは、それまでの教養科目がSDGsに関連づけられ、「SDGs基礎」「SDGs発展」「SDGsゼミ」などの「CHP（Creating Happiness Program）」科目群に再編されました。科目の開講にあたっては、全学科の教員に授業担当を依頼するなど、全学的な態勢を整え、「世界の幸せをカタチにする。」ため、新入生全員がSDGsについて深く、そして広く学んでいます。

今後も、武蔵野大学に学ぶ学生達が、SDGsの実践的学びを力に、2050年の未来に向けて世界のハピネス・クリエイターとして活躍することを願っています。

武蔵野大学
学長　西本 照真

本書の刊行にあたって

武蔵野大学は、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向け、高等教育機関としての社会的責任を果たすべく、積極的な取り組みを行ってまいりました。

巻頭言にもございます通り、その足跡は2019年3月に発表された「武蔵野大学SDGs実行宣言」に始まり、「いきとし生けるものが幸せになるために」という建学の精神に基づき、誰一人取り残さないWell-beingな社会の実現を目指しています。

現在までに各部門で行われてきた多様な活動は、地域社会や国際社会に対する貢献を通じて、学生たちが持続可能な未来を築くための実践的な学びを得る機会となっています。

また、中長期計画においてもSDGsは重要な位置づけを占めており、各学部・研究科・研究所がSDGsの17目標に基づいた教育・研究活動を意識的かつ具体的に実施・推進することで、大学全体が持続可能な社会の実現に向けて一丸となって努力しています。

私たちは、今後も高等教育機関としての使命を果たし、持続可能な未来を築くために、引き続き努力を続けてまいります。

「武蔵野大学SDGs活動白書」は、本学がこれまでに実践してきたSDGs関連の主要な取り組みを紹介し、その成果と課題を明らかにするものです。

本白書が、武蔵野大学のSDGsへの取り組みを理解し、共に未来の社会を考えるための一助となることを念じています。

2025年3月
武蔵野大学
副学長　北條 英勝

1-1 武蔵野大学SDGs実行宣言（全学版）の制定について

武蔵野大学は、2019年3月に武蔵野大学SDGs実行宣言を発表した。

SDGsとは、Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）の略称。2015年9月の国連サミットで採択されたもので、国連加盟193か国が2016年～2030年の15年間で達成するために掲げた目標である。

「いきとし生けるものが幸せになるために」、「生きがいのある楽しい平和の世界をうち立てたい」という武蔵野大学の建学の理想は、SDGsにおける「誰一人取り残さない」という基本理念と軌を一にしている。

以下が、実行宣言の全文である。

武蔵野大学SDGs実行宣言

私たち武蔵野大学は、2015年に国連サミットで採択されたSDGs（Sustainable Development Goals）、すなわち17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」の実行に向けて、すべての学生と教職員を挙げて全力で邁進することをここに宣言する。

本学は、1924年、関東大震災の翌年、深い悲しみ、苦しみのなかに、小さな光を灯すように、東京築地本願寺で産声を上げた。「いきとし生けるものが幸せになるために」という仏教の根源的願いは、2024年に創立100周年を迎える武蔵野大学の生命線として脈々と受け継がれてきた。その願いを今日的に具現化していくために、2016年、「世界の幸せをカタチにする。」(Creating Peace & Happiness for the World)をブランドステートメントとして宣言した。

このブランドステートメントの根底には、「世界は、幸せか。」という問いがある。誰もが命をおびやかされることなく、平和に過ごせる世界にできないだろうか。誰ひとりとして、涙している人のいない世界にできないだろうか。生きているものぜんぶが、よりよくつながる世界にできないだろうか。このような問いに真摯に向き合い、感覚を研ぎ澄ませ、世界で起きていることを能動的に感じとり、感じ取った課題を解決するためには何をすべきか。互いに知恵を開き合い、一人ではできないことならば、価値観や言葉の境も超えて、異なる力を響き合わせ、世界の幸せをカタチにするために挑もう。在学生、同窓生、未来生、教職員、ブランドステートメントに共鳴するあらゆる個人や団体が力を合わせて、世界の幸せの響創者(Happiness Creator)として歩んでいきたい。これが武蔵野大学の決意である。

国連が採択した「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」には2030年までに、あらゆる貧困と飢餓に終止符を打つこと、国内的・国際的なあらゆる不平等と戦うこと、平和で、公正かつ包括的な社会をうち立てること、人権を保護しジェンダー平等と女性・女児の能力強化を進めること、地球と天然資源の永続的な保護を確保すること、持続可能で、包摂的な経済成長、共有された繁栄及び働きがいのある人間らしい仕事のための条件を作り出すことの決意が表明されている。その上で、「この偉大な共同の旅に乗り出すにあたり、我々は誰も取り残さない」ことが誓われている。国連が取り組んでいるSDGsの「誰一人取り残さない」という基本理念と諸課題の実現とは、本学の「いきとし生けるものが幸せになるために」という根源的願い、「世界の幸せをカタチにする。」というブランドステートメントと軌を一にするものである。

武蔵野大学には、11学部、19学科、12研究科、24研究所・センターがある。私たちは、SDGs実行をここに宣言することによって、各学部・研究科・研究所においてSDGsの17の目標のうち、それぞれが担当する領域に根ざした活動を意識的かつ具体的に行っていく。同時に、ブランドステートメントの牽引役を担う「Musashino University Creating Happiness Incubation」(しあわせ研究所)においては、SDGsの具体的実践とともに真の幸せとは何であるかという最奥部の問いに関する学問的探究も深めていきたい。武蔵野大学は仏教精神に基づく大学であり、それは、単なる論説だけに終始するのではなく、人々の安寧と世界の幸福を求めて具体的な社会活動を実践していく精神にほかならない。象牙の塔にこもるのではなく、街に出て、現場に出て、人々や世界と直に接し、「世界の幸せをカタチにする。」を実現させていきたい。まことに、武蔵野大学SDGs実行宣言の核心はそうした実践にこそある。

2019年3月20日
国際幸福デー
武蔵野大学 学長　西本 照真

※宣言当時の原文のため、現在の学部等の数と異なる場合があります。

1-2 SDGs特設サイトの開設

2019年3月20日に発表された「武蔵野大学SDGs実行宣言」を受け、全学をあげてSDGsの目標達成に向けて取り組むため、各学部学科・研究所の取り組みを外部発信することを目的として、武蔵野大学ホームページ内に「SDGs特設サイト」を開設するべく、準備を開始した。

同特設サイトは、全学的に展開するSDGsの活動実態を集約し、成果を積極的に外部発信するための拠点として、2020年7月31日に開設・公開した。

https://sdgs.musashino-u.ac.jp/

公開後は、
広報課に寄せられた情報のうち
SDGsに関連する活動報告を
随時掲載している。

1-3 各学部等における「SDGs実行宣言」の策定と成果

SDGsに軸足を置いた教育研究活動を実質的に推進・展開していくため、各学部等がそれぞれの活動領域の特性を踏まえて独自の「SDGs実行宣言」を策定した。

各学部等の「SDGs実行宣言」と、主な活動成果は以下の通りである。

文学部 SDGs実行宣言

目標「読むことの喜びを、より多くの人に」

平和的な発展と持続可能な社会の実現のためには、自然科学の発展に期待するだけでは十分ではありません。近代世界システムを支えてきた権力体、暴力や欲望の連鎖を批判的に考察するだけでも十分ではありません。私たち一人一人の価値観、人生観、社会観、自然観、成長観を根本から見つめなおし、また見つめなおすことに喜びを見出す必要があるように思われます。個人の生き方や考え方の再検討は、人類の叡智が創り出してきた様々な制作物（書物だけではなく「世界」や「社会」なども含みます）に敬意を払い、それらを享受し批評的に「読む」行為の中で実践することができます。

物語世界の中を生きる他者の人生を想像し、自己の価値観とは異なる価値観の内面化を試みます。主体的に読むという行為を通じてあらゆる対象物をテクストとして検証し、検証したのちにまた読みかえします。多様で多層であった「近代」を、多元的に捉えて対象化するために、地域社会の特性を文学文化との関係の中で明らかにします。そこでの成果を、学生に、そして市民に、より多くの人に伝えます。他方で、諸テクストを「読む」ことを通して学生や市民が発する声に耳を傾け、テクストを通して対話を重ねます。

例えば古典文学を読む立場からは、「あはれ」や「をかし」、「なりゆく」など、制度や時代相の変遷を超えて通底する価値観や自然観、人生観を捉え、近代との連続と断絶とを見極めつつ持続可能な社会を想うことができます。近代文学を読む立場からは、近代における内発性を重視した夏目漱石の「現代日本の開化」をはじめとするテクスト中に同時代としての近代（化）との葛藤や反措定を見出し、相対化されてきた近代の世界観、人生観などを把握した上で近代の終わりと来るべき持続可能な社会とを想うことができます。

これまで行ってきたこうした諸活動が、すべての人々の「健康で文化的な最低限度の生活」の実現に繋がり、持続可能な社会の実現への一助となることが私たちの願いです。ここに「読むことの喜びを、より多くの人に」という目標を掲げて教育と研究と創作とを実践的に行うことを宣言します。

文学部 SDGs実行宣言に基づく成果

文学部では、「読むことの喜びを、より多くの人に」という目標を掲げている。その目標を達成するために日常的に様々な施策を実施しているが、ここでは代表的な一例として、西東京市図書館との連携事業の報告書を添付し、WEB上にある「西東京市図書館 × 武蔵野大学文学部 共催展示『大学生が選ぶ心に残る一冊』開催案内」を紹介して成果報告に代えたいと思います。

https://www.library.city.nishitokyo.lg.jp/blog;jsessionid=3FD00A41A1BCDF0C8BEFCC421625CF09?0&pid=2113

グローバル学部 SDGs実行宣言

Ⅰ. 学内外のグローバルコミュニティにおいて SDGs実行当事者として3学科の担当領域で17目標達成を目指します。

Ⅱ. 学生がSDGs課題を自分事として実行する過程・成果を エントリーシート・面接等の就職活動に反映する指導を行います。

グローバルコミュニケーション学科

2年次後期の必修科目「グローバルスタディーズ」において、2年次前期の「全員留学」の経験をベースとしながら、グローバルな視点からSDGsの17の目標から課題を選択し、調査を行い、成果を発表します。多様な背景を持つ学生同士の協同作業により、グローバル社会で生起する事象や課題に対して、歴史や文化・社会などの側面から多面的に検討する姿勢を養うとともに、課題に対する理解や問題解決への意欲を高めます。

日本語コミュニケーション学科

日本語母語の学生と留学生約半数ずつが多文化・多言語共修環境の中で学び合う本学科は、日本語教育学と観光学に立脚し、日本語でのコミュニケーションを必要とする学習者・生活者の支援や、多文化共生の場の運営において活用できるスペシャリスト、そして、地域の活性化を世界につなぐビジネスなどで活躍する人財の養成を通じて、特に目標 4「質の高い教育をみんなに」、10「人や国の不平等をなくそう」、8「働きがいも経済成長も」、17「パートナーシップで目標を達成しよう」の実現に努めます。

グローバルビジネス学科

様々な国・地域から集まった学生が共にビジネスを英語で学ぶという学科の特色を最大限に活かして、17の各目標について多種多様な価値観を交えながら活発な議論を展開していきます。そのうえで、グローバル・ノース、グローバル・サウス双方の視点に立った実効性のある課題解決策を具体的なビジネスプランとして導き出し、その課題解決策を英語でもって日本国内のみならず海外に向けても発信していきます。

グローバル学部 SDGs実行宣言に基づく成果

- 各学科の専門性を活かして、必修科目のグローバルスタディーズやグローバルプロジェクトにおいて、SDGsの実現を念頭に具体的な目標を分析し、学生が主体的に調査研究を行うとともに、課題を解決するアイディアを考案した。
- このような学びをベースにして、学外ボランティアへの参加意思を表明したり、国際的なシンポジウムでリサーチ成果を発表する学生も見られた。

法学部 SDGs実行宣言

法律学、政治学の専門知識を活用して、持続可能な社会を実現します。

企業、地域、地方公共団体、国、世界、というあらゆる段階の「自己の属する集団」において、最適なルールを創り、その集団のリーダーとなって、構成員を幸福にしていける人材を育成することを通じて、持続可能な地球社会の創成に貢献します（両学科の特色を生かしつつ、学部として協調的な育成を図ります）。

法律学科

● 実行宣言：「ともに学び、ともに教えあう、ルール創り教育を行います」

法律学科は、創設以来、単にルール（法律）を知るにとどまらず、自らルールの必要性を考え、最適なルールを創り、ルールを使いこなせることを教育の目標としてきました。それぞれが所属する集団において、その集団がどれだけ小さなものであっても、そこで最適なルールを創り、そこに幸せをもたらすことができれば、その積み重ねで、ゆくゆくは、広く世界を幸せに導くことも可能であると考えます。幸せな世界へ至る過程のうちに、持続可能な世界の実現を位置づけ、法律学科は、これまでと同じく、どのようなルールを創ることが世界の幸せに繋がるかを主体的に考えられるように、ともに学び、ともに教えあう、ルール創り教育を行います。

政治学科

● 実行宣言：「グローバルからローカルまで～ボーダレスに活躍できる人材を育成します」

政治学科は、社会の諸問題の解明と解決を志向し、SDGsに関連する科目を多く配置するとともに、各学年を通じてSDGsの理解を深めるための教育を行います。グローバルからローカルまで、様々な視点から世界の幸せの実現を考えることができ、ボーダレスに活躍することのできる人材の育成を目指します。

法学部 SDGs実行宣言に基づく成果

- 法律学科では、学科科目として、「共生の法律学」を開設し、オムニバスで、国際法、難民問題、多文化共生等を取り上げてきた。
- 政治学科では、学科科目として、「アクティブ・ラーニングで学ぶSDGs」を推進してきた。
- ゼミナール活動として、「日本の漁業実態に関する訪問調査」を進めてきた。
- フィールド・スタディーズとして、「入管・税関視察プログラム」および「武蔵野地区空き家等状況調査」を継続している。

経済学部 SDGs実行宣言

経済学の視点から、SDGsの諸目標に関わる諸問題の改善・解決に貢献する人材を養成します。

武蔵野大学は、2019年3月に武蔵野大学SDGs〔Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）〕実行宣言を発表しましたが、経済学部は、まさに経済学の目標でもあるSDGsを積極的に受け止め、各教員が、働きがい、経済成長、環境保護、貧困撲滅のようなSDGsの諸目標と結びつけて、研究・教育を実践します。

グローバル化が加速し、情報通信技術が日進月歩で進んで変動を続けている現代社会。そこには、大量生産・大量消費社会の限界、財政・金融危機、市民社会と企業活動のあり方、経済格差の拡大、地球環境問題、エネルギー資源問題、少子高齢化問題、さらに感染症問題など、資本主義の本質にも関わるさまざまな課題が存在します。経済学部は、経済学の視点から、こうした課題の原因や背景を究明し、その改善策や解決策を提案できる能力を養成するとともに、明晰な論理性と豊かな感受性の双方をもってより良い社会作りに貢献できる人材を送り出すことを目標としています。

教育では、1年次から4年次にかけて段階的にSDGsの諸目標を理解・習得し、それを踏まえて最終的に自らの研究成果をまとめあげることを目標としています。

1年次：SDGsを身近なものとして捉える（初年次ゼミ、大学での学び方、FS）。
2年次：SDGsに関する国内外の取り組みを知る（プレゼミ、外部講師招聘）。
3年次：SDGsに関する国内外の課題を知り、課題解決への取り組みを始める（ゼミ、合同ゼミ、ディベート大会）。
4年次：SDGsに関する4年間の取り組み・研究成果をまとめる（卒業論文）。

経済学部 SDGs実行宣言に基づく成果

3年生の合同ゼミで「学科横断ディベート交流会」を開催した。「株価の高い企業は優良企業か優良企業ではないか」「日本は外国人労働者の受け入れを拡大すべきか否か」など、学生自身で4つのテーマを選定し、賛成・反対のグループ毎に、いずれのテーマもSDGsとの関連性を検討したうえで議論を重ねて交流会に臨んだ。日本および世界が直面している経済・社会問題について、SDGsの観点から議論を行い、ゼミ間の交流が深まった。

経営学部 SDGs実行宣言

持続可能な社会の実現にむけて、行為の先を見据える目を育みます。

国連の掲げる持続可能な開発目標（SDGs）は、ミレニアム開発目標やRio+20を経て策定されました。そこで議論された貧困問題や深刻化する環境課題等の一端は、世界中に存在する企業の活動によってもたらされています。意図せざることであったとしても、結果として世界的な課題の起因となったものもあります。

しかし同時に、企業は持続可能な開発目標に向けて活動する主要な主体の1つでもあり、自らの利益のみではなく、その先を見据えることにより、世界的な課題の解決に参画できる主体でもあるのです。経営学は、企業を中心とする組織活動を主たる研究対象とする学問であるからこそ、世界的な課題が生み出された背景を理解し、それを克服するための見識を磨くことに寄与しなければならないと言えます。

大半の企業は、1人では成し遂げられない事を為すために組織化され、異なる知識や技能を持つ多彩な人材の力を結集して取り組みます。活動に必要な資源は組織の外からもたらされ、活動の結果は組織の外に影響を与えるという基本的な事実に基づけば、今ここの行為が、いかに波及するのかを理解することは、企業活動を理解することに他ならず、持続可能な社会を実現する上で欠くことのできない視点です。さらに、時間的空間を越えた他者との関わりを射程に入れれば、将来への影響を考慮に入れることは必然です。

経営学部では、経営学科と会計ガバナンス学科がそれぞれの特色を生かして、持続可能な社会の実現にむけて、行為の先を見据える目を育てることをここに宣言します。組織によって直面する社会的課題が異なることから、特定のSDGs目標のみに絞るのではなく、目標が相互接続的である点にも思いを巡らせると共に、社会的相互作用の中にあって近視眼的な活動では本質的な解決が望めない社会的課題に取り組める人材を育成し、持続可能な社会の実現に貢献します。

経営学部 SDGs実行宣言に基づく成果

- SDGsに関連してESGに関する学びを経営学科、会計ガバナンス学科の両学科で行っている。
- SDGs関連の展示会見学やリサイクル工場の見学、グループワークにてSDGsビジネスプランを策定する等、各学科でそれぞれにSDGsの理解を深める取り組みを行っている。
- 企業によるSDGsの取り組み事例を学ぶ機会が増えたことで、自分たちの日常生活や将来のキャリア設計とSDGsとの関わりへの意識を高める学生が増えている。

アントレプレナーシップ学部 SDGs実行宣言

アントレプレナーシップ(起業家精神)とは、「高い志と倫理観に基づき、失敗を恐れずに踏み出し、新たな価値を見いだし、創造していくマインド」です。

SDGsを議論する上で「変革(＝イノベーション)」は必要不可欠なものであり、イノベーションを生み出す主体であるアントレプレナーが宿すアントレプレナーシップは、SDGsの達成を可能とする源泉と捉えることができます。

SDGsを達成するためには、私たちが自らのアントレプレナーシップを原動力に実践を積み重ねていくことが必要となります。そのために、私たちは以下の観点をもち行動します。

1. いまの自分にできることから始める

自分が意欲を持って取り組みたいと考える大きな社会的課題に対して、頭の中で考えるだけではなく、今の自分にもできる小さなゴールを設定し、実践することが求められます。いまの自分にできることから始め、ソーシャル・インパクト(社会的影響力)を与えるまで積み重ねていきます。

2. まわりの人を巻き込む

1人では難しいことも、周りの人を巻き込み協力し合うことで、大きな課題を実現させることが可能となります。対話と議論を重ねながら、多くの仲間とともに行動していきます。

持続可能な社会を可能とするアントレプレナーシップは、自らの実践によって「事を成す」ための原動力となるものです。“Think globally, act locally(地球規模で考えて、足元から行動せよ)”という言葉があるように、SDGsをはじめとする大きな社会的課題に対して、自ら実践できることに着実に取り組んでいくことが私たちに求められています。

私たちは、持続可能な社会を実現するエネルギーの源泉としてアントレプレナーシップを位置付け、いまの自分にできることから行動を始め、まわりの人を巻き込みながら、SDGsの達成に向け行動していきます。

アントレプレナーシップ学部 SDGs実行宣言に基づく成果

1. 津吹ゼミナールのカンボジアプロジェクト

EMC*津吹ゼミナールでは、カンボジアを対象とした国際的なプロジェクト活動を展開している。学生が現地を訪問し、障害者施設への支援や、施設で生産されるドライフルーツの輸入販売を行っている。この活動を通じて、学生は現地の社会的・経済的課題を実感し、解決に向けた実践的なスキルを養成している。また、グローバルな視点を持ち、地域社会と連携した起業家精神の育成を目指している。

*EMC＝Entrepreneurship Musashino Campus アントレプレナーシップ学部の愛称。

2. 池本ゼミナールのクラウドファンディング活動

池本ゼミナールでは、貧困や虐待により親を頼れない若者への伴走支援を行っている。この目的を達成するため、クラウドファンディングを活用し、高品質な教育機会を提供している。これにより、若者が自立するための環境を整備するとともに、教育を軸に社会的弱者を支える活動を展開している。この取り組みを通じ、学生は社会課題に向き合い、持続可能な社会の実現に貢献している。

3. 三鷹学生寮による地域貢献こども食堂

三鷹学生寮では、地域貢献活動として学生寮の資源を活用し、こども食堂を運営している。この活動は、地域の子どもたちに温かい食事と安心できる交流の場を提供することを目的としている。学生と地域住民が協力し、地域の課題解決に取り組むことで、地域社会の活性化と信頼関係の構築を促進している。この経験を通じて、学生は地域連携や課題解決のスキルを向上させている。

4. 西会津「結」おむすびプロジェクト

西会津では、地域農家と連携し、地元農産物を活用した「結」おむすびプロジェクトを展開している。この取り組みは、農家支援と食の重要性を伝えることを目的としている。おむすびの販売を通じて地域の魅力を発信し、地方創生を推進している。学生と農家が協力することで、食の新しい価値を創造し、都市と地方を結びつける活動を実現している。これにより、学生は地域課題への理解と実践力を育んでいる。

5. 古着リサイクル活動

学生主導で古着リサイクル活動を実施している。この活動は、不要となった衣類を回収・再利用し、資源の有効活用と環境負荷の軽減を図るものである。循環型社会の実現を目指し、学生や地域住民の意識向上と参加を促している。収益や再利用品は必要とされる場へ提供され、社会貢献にも寄与している。これにより、学生は環境問題への理解を深め、持続可能な社会を実現するための行動力を育成している。

データサイエンス学部 SDGs実行宣言

私たちMU-DSは、2015年に国連サミットで採択されたSDGs (Sustainable Development Goals)の実行に向けて、自然環境・社会環境の持続可能な維持・発展を探求し、データサイエンス領域に関する知識、技能、創造力を駆使し、多様かつ複雑なデータを対象として、迅速かつ適切に人類の存続と平和に寄与する有益な知識の蓄積・分析・発見・統合・発信により、持続可能な自然環境、社会環境の実現に貢献します。

データサイエンス学部 SDGs実行宣言に基づく成果

- 2018年より取り組んでいる海洋環境研究・教育プロジェクトにおいて、タイ・プーケットPSU大学、フィンランド・タンペレ大学、インドネシア・スラバヤ工科大学EEPISの研究機関と共に、マングローブ・エリアにおけるプラスティック削減活動とグローバル海洋環境システムによる環境改善貢献の国際発信機構の実現を推進した。
- サイバー・フィジカル美術館プロジェクト及びEJC2024国際学会において、国際的なクロスカルチャル・コミュニケーションを実現し、異分野の交流・相互理解を推進するシステムの国際共同研究・教育を開始した。
- 国境を越え、より多くの国の学生を伴う国際研究・教育環境を実現するため、多言語対応の教育・研究情報環境について、検討と設計を開始した。

人間科学部 SDGs実行宣言

誰一人取り残さない

―― この偉大な共同の旅に乗り出すにあたり、我々は誰も取り残さないことを誓う。人々の尊厳は基本的なものであるとの認識の下に、目標とターゲットがすべての国、すべての人々及び社会のすべての部分で満たされることを望む。そして我々は、最も遅れているところに第一に手を伸ばすべく努力する ――

国連「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」から人間科学部とSDGsとの関わりは直接的です。SDGsの17の目標は、人間、地球、繁栄、平和、パートナーシップの5つの視点に分けられます。そのうち、人間に関する目標は、「あらゆる形態と次元の貧困と飢餓に終止符を打つとともに、すべての人間が尊厳を持ち、平等に、かつ健全な環境の下でその潜在能力を発揮できるようにする（目標1、2、3、4、5および6）」と説明されており、主に開発途上国を念頭に置いた目標だとされています。しかし、実際には日本でも、子どもやシングルマザーや高齢者の貧困や不健康、子どもや若い世代・女性に対する虐待や暴力の問題、障害のある人たちの機会の不平等、意思決定や収入に関するジェンダー不平等など、解決されていない問題が山積しています。そしてこれらの問題が、bio-psycho-socialに、一生を通じて人の健康や幸福に影響を与えます。私たちの学部はまさにこのような領域を追究しています。

人間科学部の2つの学科、1つの研究科、さらに3つの研究所とセンターは、これらの問題の解決を自ら考え、行動する人を輩出したい、また学生や教員の活動を通じて、直接社会に貢献したいと考えています。どんな社会にも、多様な理由で取り残される人がいます。私たちの領域や目標に最もふさわしいのは、国連アジェンダにある「誰一人取り残さない」という言葉です。

人間科学部 SDGs実行宣言に基づく成果

講義やゼミ・実習、イベントなどで、直接的にSDGs課題（例えば、子ども・女性・高齢者・障害のある人たちの貧困や不健康、機会・意思決定・収入に関する不平等、虐待や暴力の問題など）を取り上げ続けた。学生たちは、これらの問題が一生を通じて人々の健康や幸福に影響を与えることを学び、多様性への理解を深め、誰一人取り残さないという理念を体現すべく、授業外でも課題解決に向けて行動するようになってきている。

工学部 SDGs実行宣言

工学部は2019年11月に工学部SDGs実行宣言を行いました。

武蔵野大学工学部は、希望ある未来を築くために、サステナビリティ・環境システム、数理工学、建築デザインという3つの専門領域の特徴を活かし、以下の持続可能な開発目標に重点を置いて、研究及び実践活動を展開します。

3「すべての人に健康と福祉を」
4「質の高い教育をみんなに」
7「エネルギーをみんなに そしてクリーンに」
9「産業と技術革新の基盤をつくろう」
11「住み続けられるまちづくりを」
12「つくる責任、使う責任」
13「気候変動に具体的な対策を」
14「海の豊かさを守ろう」
15「陸の豊かさも守ろう」
17「パートナーシップで目標を達成しよう」

サステナビリティ学科・環境システム学科

我々が、生きること、暮らすこと、豊かな社会を営むことは、自然の恵み（きれいな水、食料、空気や気候など）に支えられています。しかし、我々は過剰な消費や廃棄、環境破壊や汚染によって、その恵みの源である自然生態系、つまり我々自身の「家」を破壊し続けています。例えば、化石燃料の大量消費は気候変動を引き起こし、我々自身の安全な暮らしを脅かしつつあります。世界中の科学者は、人間の活動はすでに地球の容量を超えてしまっていると警告を発しています。この持続「不」可能な状態を脱し、100年先も人類が地球上で豊かに生き続けられる明るい未来をつくることがサステナビリティ学科・環境システム学科の存在意義であり、そこに集う者の使命です。

サステナビリティ学科・環境システム学科は、SDGsを持続可能社会に向かうマイルストーンとしてとらえ、環境科学とマネジメントの専門性、創造性と実行力をもってその課題に取り組みます。具体的には、学科のすべての教員、学生がそれぞれにSDGsに関連するプロジェクトを立ち上げ、エネルギーや気候変動対策、資源循環、環境汚染防止、自然環境保全などの面から持続可能な社会のあり方を問い、環境モニタリングや技術開発、政策やライフスタイルの提言、環境教育や多様な主体との共創（コ・クリエーション）を通じて持続可能な社会づくりに貢献します。

全般

持続可能性とは何かという観点から、特に地域と地球の環境の保全と活用、脆弱性の高い人々の包摂と公平に配慮して、将来の社会経済のありかたを検討し、実践していきます。

3「すべての人に健康と福祉を」

気候変動に伴う大きな影響の一つである熱中症の予防対策、あるいは子どもや高齢者、障がい者など弱者の福祉につながる環境対策に関する研究・教育を行います。

4「質の高い教育をみんなに」

持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイルの変革について教育・研究を行います。

7「エネルギーをみんなに そしてクリーンに」

再生可能エネルギー利用の大幅拡大に向けた技術、経済面からの研究・教育を行います。

11「住み続けられるまちづくりを」

都市インフラの老朽化や気候変動の影響等に配慮した都市のあり方に関する教育・研究を行います。

12「つくる責任 つかう責任」

資源循環の改善による省資源化と環境負荷の削減に向けた教育・研究を行います。

13「気候変動に具体的な対策を」

気象の極端現象のモニタリングと適応策、あるいはゼロカーボンに向けた緩和策に関する教育・研究を実施します。

14「海の豊かさを守ろう」

東京湾などの海洋汚染調査を実施します。

15「陸の豊かさも守ろう」

都市における自然環境保全や緑のネットワークに関する教育・研究を行います。

17「パートナーシップで目標を達成しよう」

地域を超えて、企業、自治体、地域コミュニティ、NPOなどとの連携を図り、共創（コ・クリエーション）によりSDGsに関する課題解決と持続可能な未来を先駆けるプロジェクトを実施します。

これらの教育・研究プロジェクトの成果を世の中に発信し、持続可能な社会の実現を推進します。

数理工学科

数理工学的手法を修得し、幅広い視野をもち、未知の問題に取り組むことのできる柔軟な思考を養うことで、持続可能な社会構築に向けて主体的に参画し、産業と技術革新の基盤をつくり新しい技術を支える研究及び実践活動を展開します。

9「産業と技術革新の基盤をつくろう」

1. 研究開発

- 社会インフラに対して、新しい交通流モデルによる渋滞解消理論の構築、新しい大規模構造ヘルスモニタリングシステム技術の提案、き裂進展数理モデルの拡張による材料開発への応用等を目指していきます。
- 経済インフラに対して、事業性を反映した企業評価の理論モデルを構築し、与信判断におけるモデルの有用性の実証を目指していきます。

2. 教育実践

- 中高校生を対象にした数理工学コンテストの実施を通じて、身近にある不思議な現象や興味深い事象を、数理の力を使って解き明かし発表する機会を提供します。
- 数理工学シンポジウムにおいて、数理工学に関する多彩なテーマの講演を公開し、産業における数理の役割を発信します。
- 数理工学の研究開発を基盤に、実践的プロジェクトを促進し、コンテストなどを通して社会へ発信します。

建築デザイン学科

建築学の豊かな教養を基盤に、幅広い視野をもち、多様化する現代社会の課題に向けて自ら取り組むことのできる柔軟な思考を養うことで、建築・都市の未来を構想し、住み続けられるまちづくりを支える研究及び実践活動を展開します。

11「住み続けられるまちづくりを」

1. 計画分野

教育研究活動を通じて建築のデザインやまちづくりのあり方を理解することで、都市や地域のコミュニティの自律的な発展に寄与する活動に参加します。

- 地域自治体と協働した地域再生活動
- 公共施設と連携したイベントへの作品出展、ワークショップ実施
- 地域アート展・フェスティバルへの出展

2. 構造分野

教育研究活動を通じてレジリエンス（安全・強靱）な都市と建築のあり方を理解し、安全・安心なまちづくり、形態デザインに寄与する活動に参加します。

- 学会主催セミナーへの出展・参加
- HPシェル構造物の制作演習

3. 環境分野

教育研究活動を通じて建築と環境工学の関係性を理解することで、都市や街全体の環境負荷低減に繋がる建築物の省エネ・省CO_2に寄与する活動に参加します。

- エネルギーデータなどを活用した企業との協働研究
- 武蔵野大学キャンパスの省エネルギー計画の策定を行う演習授業

4. 防災分野

教育研究活動を通じて、都市・地域・建築における防災のあり方を理解し、安全・安心な「まち」「地域コミュニティ」「住まい」づくりへ寄与する活動に参加します。

- 防災教育に関するコンテンツ作成
- 地域防災マップの制作
- 防災意識を高める啓発活動

工学部 SDGs実行宣言に基づく成果

サステナビリティ学科・環境システム学科

サステナビリティ学科・環境システム学科では、SDGsを持続可能社会に向かうマイルストーンとしてとらえ、環境科学とマネジメントの専門性、創造性と実行力をもってその課題に取り組んでいます。具体的には、学科のすべての教員、学生がそれぞれに関連するプロジェクトを立ち上げ、エネルギーや気候変動対策、資源循環、環境汚染防止、自然環境保全などの面から持続可能な社会のあり方を問い、環境モニタリングや技術開発、政策やライフスタイルの提言、環境教育や多様な主体との共創（コ・クリエーション）を通じて持続可能な社会づくりに貢献してきました。

数理工学科

- SDGs（目標9:産業と技術革新の基盤をつくろう）を念頭に、学生が自主的に課題を発見できるように議論を促し、その課題解決に向けた技術の獲得への取り組みを行った。
- データサイエンスやIoTの技術を用いて新しい技術の獲得と社会的課題の解決へ向けた提案を行い、各種コンテスト（データビジネス創造コンテスト（DIG 18）入賞1件）や国際会議（The IAFOR Undergraduate Research Symposium（IRUS）4名発表）で発表した。

建築デザイン学科

- 計画・構造・環境・防災の各分野において、キャンパス周辺から地方を含む地域の自治体、総合建設業・エネルギー会社等の企業と連携・協働したイベントやアート活動、調査研究、教育啓発活動を実施した。
- これにより、建築によるSDGs達成を目指して、学生たちが個人や授業、ゼミ活動といった複数のレベルで考動し、実践し、見つめ直すという一連のサイクル※を経験した。

※「問う」⇒「考動する」⇒「カタチにする」⇒「見つめ直す」という一連の活動を繰り返すことで互いに学び合い、高め合っていくという本学独自の学びのスタイル（響学スパイラル）

教育学部 SDGs実行宣言

教育学部は日本の教育・保育に携わる人材の育成を中心としています。日本の教育・保育の現状を概観すると、必ずしも「すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する(目標4：質の高い教育をみんなに)」ことが達成されているとは言えません。家庭の経済的格差などによる教育機会の格差をはじめ、様々な格差が社会の中に存在しています。それらを解消するよう教育の機会均等や差別のない平等な教育を目指し、それらに貢献できる人材の育成の実現を目指します。

教育学科

「生きとし生けるものが幸せであるために」という仏教の基本精神を体現する際、教育はその礎になるものです。人種や国籍、宗教、民族、肌の色、性別、障害の有無等による差別なく、あらゆる個人が尊重される世界や社会を実現させるために教育が果たす役割はとても重要です。子どもの好奇心を育み、豊かな人間性と高いコミュニケーション力を持った初等・中等教育のスペシャリストとして学校教育に携わる人材の育成を通して、そのような世界の実現を目指します。

幼児教育学科

人がこの世界に生まれ、はじめて他者や社会と関わりながら育つ場が保育・幼児教育です。保育・幼児教育は人間形成の基礎に深く関わります。しかし、日本においてすべての子どもが十分に質の高い保育を享受することはできていません。すべての人が健やかに、そして「質の高い乳幼児の発達・ケア及び就学前教育にアクセス」(目標4.2)すること、及び乳幼児の成長において「健康、学習及び心理社会的な幸福」(目標4.2.1)の実現のためには、なにより質の高い保育を提供することのできる保育者の存在が必要不可欠です。幼児教育学科では、これからの世界を見通しながら、子どものそして世界の幸せに貢献できる感性豊かな保育者の育成を目指します。

教育学部 SDGs実行宣言に基づく成果

- 教育学部では、特にSDGs目標4「質の高い教育をみんなに」を意識し、必修の入門ゼミや基礎ゼミにおいて、個人あるいはグループにおいて目標4を達成する教育課題を発見し、改善策を考察する取り組みを行った。
- これにより、学生たちがSDGsの目標4の達成について考えるきっかけとなり、授業外でも課題解決に向け行動を継続する学生もあらわれている。

薬学部 SDGs実行宣言

2020：薬学系統合SDGs実行宣言

2004年に武蔵野大学の男女共学化と共に開設された薬学部は、薬学科のブランドビジョンに「多様な薬学分野で科学的志向に基づいて活躍できる問題解決・研究能力に優れた人材の養成」を掲げて教育・研究活動を展開しており、本学が創立100周年を迎える2024年に二十歳となる若い学部です。薬学科の卒業生の多くは薬剤師の職能を得て医療の分野で貢献しており、他業種とも連携して薬剤師の地位向上と職域の拡大を図ることは、本学部に集う者の重要な使命です。国連の掲げる持続可能な17の開発目標（SDGs）の中には、薬学部での活動と関わりが深いものとして、「3.あらゆる年齢の全ての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する」と「4.すべての人々への、包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」があります。この開発目標3と4に向けて、薬学部では以下の課題に取り組みます。

がん、感染症、アレルギーや慢性疾患、認知症などを克服するために、それらの発症機構の解明と新規分子標的治療薬・予防薬の探索に向けて研究を推進します。医薬品の創出に際しては、効率的かつ不斉選択的な合成法の開発や微生物・薬用植物資源からの探索を進めます。また、飲みやすい薬の提供に向けた剤型開発、より有効で安全な薬物療法・至適投与設計法の提供、医薬品の副作用発現予防に向けた要因の探索を進めます。

さらに、薬剤師を目指す全ての人への質の高い教育を提供できるような効率的な学習方法の開発とキャリア形成支援を進め、数理モデル解析、医療現場での医薬品適正使用に関わる基本情報を収集・分析できる高度薬剤師育成コースの開設を目指します。

武蔵野大学の薬学系組織である薬学部薬学科、大学院薬科学研究科、薬学研究所と2つのセンターの全ての構成員は、SDGsの「誰一人取り残さない」という基本理念とこれらの課題の実現に向けて、組織的に統合して解決策を自ら見出し、創造力豊かな薬系人材を輩出することをここに宣言します。

堅田利明（薬学部長・大学院薬科学研究科長）
薬学系統合研究発表会・講演会（2021年2月18日開催）
※役職は当時のものです。

薬学部 SDGs実行宣言に基づく成果

- 「薬学系統合企画」として、共同研究ユニット①～⑤を中心に活動し、学術集会や学術論文にて成果を発表した。
  - ① 臓器・組織特異的な疾患モデルの解析
  - ② アンメットメディカルニーズを満たす新薬創生プロジェクト
  - ③ 医薬品の創製および適正使用のための薬物動態・臨床薬理学的アプローチ
  - ④ DDS製剤が切り拓く難治性疾患治療・予防法の開発
  - ⑤ データサイエンスが紐解く生命現象の解明と創薬連携プロジェクト
- 公開シンポジウム：「薬学系統合企画」進捗と展望（2024年11月16日）を開催した。
- 各課題には、卒業研究学生や大学院生も積極的に関与し、分野横断的な基礎的な科学力の養成に繋がった。
- 文部科学省「研究支援サービス・パートナーシップ認定制度」認定企業と連携して、研究基盤整備の一環として研究機器を提供した。

看護学部 SDGs実行宣言

〈スローガン〉

看護学を基盤に、SDGs実行目標3「すべての人に健康と福祉を」を達成するための看護学部の取り組みを企画、実施する。

2021年度から始めた「むさしの健幸アンバサダー」活動は、4年生の看護ゼミをきっかけに、学部横断かつ産官学民協働による共創型アクションリサーチとして根付いています。多世代・多様な人々、そして健康無関心層が「自分ごと」と捉えて健幸を追い求めるきっかけを増やし、自然と誰もが健幸になれる豊かな社会の実現に貢献します。

看護学部 SDGs実行宣言に基づく成果

「むさしの健幸アンバサダー」活動（2021年度～）は、学部横断かつ産官学民協働による共創型アクションリサーチとして発展し4年目を迎えた。多世代・多様な人々、そして健康無関心層が健幸を「自分ごと」と捉えるきっかけを増やし、自然と誰もが健幸になれる豊かな社会の実現を目指した学際的活動である（SDGsゴール3「Health for all」）。外部機関の認証審査を受けたリーフレット4種類（性教育・歯の健康・子宮頸がん予防・梅毒予防）をもとに大学祭や学会など学生のアウトリーチ活動も活発化している。

教養教育部会 SDGs実行宣言

SDGsについて理解を深める

武蔵野大学教養教育部会は、武蔵野大学の全学共通教育・教養教育を担う組織として、武蔵野大学長より発出された「武蔵野大学SDGs実行宣言」の趣旨をふまえ、以下のように宣言する。

SDGsの諸目標は、今日の世界がいかなる問題を抱えているか、そしてそれらをいかにして解決すべきであるかを、数値目標と目標年次とともに、具体的に指摘している。大学の教育組織として取り組むべきは、将来を担う人材を世に送りだすにあたり、今日の世界を知るために大きな手がかりを与えてくれるSDGsについて、十分な理解を促す機会をカリキュラムにおいて提供し、世界に向きあおうとする姿勢を教育の現場において培うことである。

われわれは「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」において示されたSDGsが、世界のいかなる問題を受けとめようとしているのか、「2030アジェンダ」を採択した国連という組織が、過去数十年の歴史においていかにしてこれらの問題に対処しようとしてきたのか、またその活動において世界の現状をめぐる認識をどのように深めてきたのか、まずは知る必要がある。その上で、世界のひずみと危機を生みだす構造をいかにして克服すべきか、そのための態勢をいかにして構築すべきか、今日の世界に生きる人間としていかなる貢献をなしうるかを理解し、一人ひとりが実践を促される課題として受けとめる必要がある。教育に期待される役割は、このように列挙しうる様々な要請を「わがこと」として受けとめる知的・倫理的環境を、大学というコミュニティに醸成することであろう。自らの幸せだけでなく、他者の幸せをも真摯に希求することを求める本学の建学の精神に照らすなら、これは武蔵野大学の教育、ことに全学に共通する教育に強く求められるはずである。

武蔵野大学教養教育部会は、2021年4月、全学共通教育プログラム「武蔵野INITIAL」に、必修科目としての「SDGs基礎」と「SDGs発展」を開設した。2023年4月には、これに選択科目の「SDGs特講」を加えた。科目の開講にあたっては、教養教育部会所属の教員のみならず、武蔵野大学の全学部・全学科に授業担当を依頼し、全学的な態勢を整えた。また、2023年3月には「SDGs基礎」および「SDGs発展」の教科書として、武蔵野大学出版会より『SDGsの基礎　～みずから学ぶ世界の課題』を刊行した。これらを通じ、武蔵野大学はSDGsに関するきわめて特色ある教育態勢を整えたと自負する。

SDGsに関する特色ある教育を全学的に展開すること。これが武蔵野大学教養教育部会のこころざしである。

教養教育部会 SDGs実行宣言に基づく成果

- 2021年度より、全学共通教育プログラム「武蔵野INITIAL」の初年次の必修科目として「SDGs基礎」「SDGs発展」を開講し、全学の教員の協力を得て現在まで運用している。2023年度には、これに選択科目「SDGs特講」を加えた。
- 2023年4月にSDGs科目で使用する共通教科書として『SDGsの基礎～みずから学ぶ世界の課題』(武蔵野大学出版会)を刊行した。

通信教育部 SDGs実行宣言

世界の幸せにつながる心理学・仏教学・社会福祉学・教育学・看護学を、
「いつでも、どこでも」学べる通信教育部。
多様な学修ニーズに対応して、「いつでも、どこでも」学びと、学士取得を支えます。

武蔵野大学通信教育部は、2002年度に開設され、20年以上の歩みを続けています。

インターネット通信教育システム「WBT」を通して、通信教育部の学生は、時間や場所を問わず「いつでも、どこでも」学ぶことができます。通信教育部における教育は、これまでも、今も、そしてこれからも、**【SDGs4「質の高い教育をみんなに」】**を実践している／実践する、と言えます。

また、本学通信教育部での学修は、おもに**【SDGs1「貧困をなくそう」】【SDGs3「すべての人に医療と福祉を」】【SDGs5「ジェンダー平等を実現しよう」】**を実現することにつながっています。

2024年10月現在、通信教育部人間科学部（人間科学科）には学生および科目等履修生を合わせて約3,700人が、通信教育部教育学部（教育学科）には学生および科目等履修生を合わせて約200人が学んでいます。

2002年の通信教育部開設当初から「編入学制度」を設け、いわゆる【社会人の方々のリカレント教育や学び直し、スキルアップ】のニーズに応えています。20代から50代を中心に10代から80代まで多くの社会人学生の方々が学んでいます。性別や年齢に関わらず、学びたいときに自分自身のための学びの時間を持つことができるカリキュラムです。

企業や組織に所属し、社会人として勤務を実践するなかであらわれる新しい「問い」、特に心理学、仏教学、社会福祉学、教育学、そして看護学に関わる学問的・実践的「問い」について、それぞれの領域の学修のなかでその「答え」を見つけていただけると考えます。それらの学びを深め、自身の心身の健康に目を向け、他者との関係をより豊かにすることで、より良い社会の実現に寄与する人材を育成することを目指しています。

また、近年は、経済的事情や健康上の事情から通学制課程に通うことが難しい状況にある学生も増加しています。通信制高校を含む高校卒業後、高校卒業程度認定試験後、あるいは一旦通学制の大学に入学した後に、さまざまな事情があったとしても通信制で【大学生としての学びを続けられる機会】があることで、多くの学生がその後の人生を拓くことができると考えます。

通信教育部の2024年度現在の学部・学科および専攻・専修・コースの構成は、

- **人間科学部－人間科学科**　心理学専攻／仏教学専攻／社会福祉専攻／看護学コース／本願寺派教師資格コース
- **教育学部－教育学科**　小学校専修／国語科専修／英語科専修

の2学部2学科3専攻・3専修・2コースです。

SDGsに掲げられている17ゴールのほとんどが、通信教育部で学べる領域に関係しています。私たちは、通信教育部での学びを通して在学生・卒業生がそれぞれに「世界の幸せをカタチにする。」実践を拡げていくことを支えます。

通信教育部 SDGs実行宣言に基づく成果

- 武蔵野大学通信教育部では、インターネットの通信教育システム「WBT」を通じて、年齢や世代問わず学びの環境を提供している。通信教育部に在籍している学生・科目等履修生は4,084人である（2024年度）。平均年齢は約41歳、男性と女性の割合はおよそ２：8であった。そして、2023年度に卒業した学生は730人であった。
- 多くの卒業生が「認定心理士」、「産業カウンセラー」、国家資格「社会福祉士」、看護学学士、教職免許状を取得し、社会で活躍している。

2-1 「SDGs科目」の開設

設置の経緯・目的

2021年度に、それまでの全学共通基礎課程「武蔵野BASIS」を、新・全学共通基礎課程「武蔵野INITIAL」にリニューアルする際、SDGsの掲げる「誰一人取り残さない」という基本理念は、武蔵野大学の建学の精神と共通することから、武蔵野大学独自のユニークな教養科目として、「SDGs科目」が設置された。

「SDGs科目」の発案当時は、まだSDGsがそれほど社会に広く知られていなかったが、SDGsに基づいた授業「SDGs基礎」「SDGs発展」「SDGs特講」によって、学生たちが世界の諸課題を考える手がかりを得て、本学のブランドステートメントでもある「世界の幸せをカタチにする。」ために何をすべきか、個々の学生が問題意識を持って、主体的な学びと実践の姿勢を身につけられることを目的に設置された。

2-2 「SDGs基礎」「SDGs発展」「SDGs特講」各科目の授業紹介

授業内容は2024年度の内容です。

SDGs基礎	1年次必修科目として「SDGs」の理念や全体像を学ぶ。学生たちがブランドステートメントの下に、グループワークなどによって、SDGsを手掛かりに、「世界の幸せをカタチにする。」方策を仲間と共に考えていける場として設定している。 科目開設当初、学部ごとにクラスを編成していたが、その後、総合大学としての強みを生かし、学生が学部・学科を越えて交流できるよう、所属学科が異なる学生同士を敢えて同じクラスにする編成方法へと改良されている。 また、担当教員については、原則として、各クラスに在籍する学生の所属学科とは異なる学科の教員が担当している。「SDGs基礎」「SDGs発展」の200弱のクラスのうち、3分の1ほどを(一般教養科目を担当する)「教養教育部会」の教員が担当、3分の2ほどを学部学科の教員が担当する体制である。 こうした設計がされている背景には、各学科の教員が主体的に初年次教育に携わり、他学科の1年生も含め、武蔵野大学に入学した学生たちの特質や関心の方向性を十分理解してもらいたいという学長の思い、また、これをきっかけとして、学生のみならず教職員を含むすべてのステークホルダーに、SDGsに対する理解・関心を高めてもらいたいという思いがあった。

SDGs発展 1・2・3	1年次必修科目として、各教員がSDGsの17目標(169ターゲット)に対応した授業を行い、それぞれのテーマを掘り下げる。世界の課題に気づき、世界と自己の関係を考え、自身の問題意識を醸成する。各教員が自身の専門を活かし、学生が高校までに学んできた内容から、さらに発展した「大学レベル」の講義を行う。 「SDGs発展」は開設当初、学生は機械的に割り当てられたクラスの授業を受講する形式であったが、現在は、各学生が自身の関心を持つ目標について扱う授業を、自由に選択して受講できる形式となっている。 ※「SDGs発展1・2・3」の授業の具体例は、【「SDGs発展」の具体例】の通り。

SDGs特講	「世界の幸せをカタチにする。」ために、元官僚や元ジャーナリスト等の教員から、多様な学問の見方・考え方を学ぶとともに、実習やディスカッション、フィールドワークなどを交え、「しあわせ」についての理解と考察を深める。3・4年次選択科目となっている。

「SDGs発展」の具体例

所属学科・教員名	主なテーマ	手　法	概　要	関連する目標番号
日本語 コミュニケーション学科 神吉 宇一	日本社会における外国人の受け入れとコミュニケーション	反転授業 ディスカッション グループワーク プレゼンテーション	人口が減少している日本社会では、女性活躍や「人生100年時代」という掛け声による高齢者の就労などによって、労働力不足を補おうとしているが、それらの政策はどれもうまくいっていない。そこで日本政府は2018年以降、外国人の受け入れを急速に進めている。本授業は、その現状と課題について、自分ごととして考えてもらうことを目的とする。	10. 人や国の不平等をなくそう 17. パートナーシップで目標を達成しよう 16. 平和と公正をすべての人に
政治学科 杉野 綾子	エネルギー、気候変動	講義	エネルギー、気候変動を中心に取り上げる。どのような問題が起きているのか、問題解決に向けてどのような議論がされているのか、どのような利害対立が存在するのか、理解を深める。なお、具体的なトピックは、履修者の関心に応じたものも取り上げていきたい。	7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに 13. 気候変動に具体的な対策を
薬学科 永井 尚美 世良 庄司	薬物等乱用	課題解決型学修 ディスカッション グループワーク プレゼンテーション	本授業では、SDGsの17目標の内、「3. あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する。」を選び、「3.5 薬物乱用やアルコールの有害な摂取を含む、物質乱用の防止・治療を強化する。」を題材として学習を進める。	3. すべての人に健康と福祉を

2-3「SDGsの基礎～みずから学ぶ世界の課題」発刊について

教科書制作に関して

SDGsの関連書籍は世の中に広く流通しているが、SDGsについて学び始める「学生の目線」で示された適切な資料はなかった。しかし、「SDGs基礎」を全学共通の科目として開設するにあたり、全クラス共通で扱う教材が必要であるとの考えから、菅原 克也教養教育部会部長を中心として、2022年春頃より教科書制作に着手した。

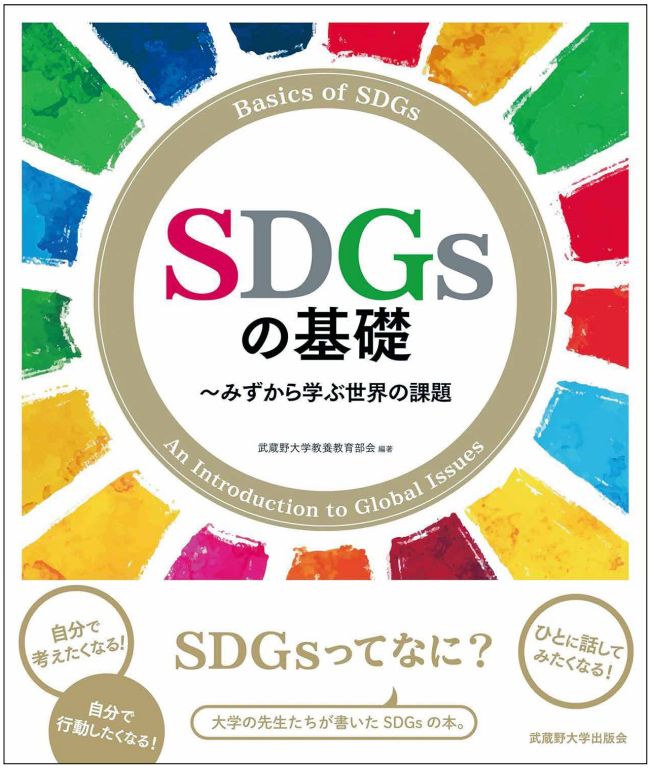
同部会にて内容について検討を重ね、学内外の研究者の協力を得て、全230ページにわたる教科書が完成し、2023年に発刊した。

同書は、現在までに複数の国内大学、高等学校にて、教科書として採用されているほか、英語版も作成し、留学生が利用できるようにしている。

教科書概要

「SDGsの基礎 ～みずから学ぶ世界の課題」

武蔵野大学　教養教育部会［編著］　　武蔵野大学出版会　2023年3月発行



【目 次】

第Ⅰ部
SDGsはじめの5講

第Ⅱ部
SDGsの基礎

1・SDGsの策定
2・SDGsと17 のゴール
3・「持続可能性」とは何か
◎［SDGs］のことば1
4・「気候変動」の基礎知識
◎［SDGs］のことば
5・SDGsと平和
6・SDGsを哲学する
◎「持続可能性」と言語

第Ⅲ部
SDGsと大学

1・SDGsと文学
2・SDGsとグローバルスタディーズ
3・SDGsと法学
4・SDGsと政治学
5・SDGsと経済学
6・SDGsと経営学
7・SDGsとアントレプレナーシップ
8・SDGsとデータサイエンス
9・SDGsと人間科学
10・SDGsとサステナビリティ学
11・SDGsと数理工学
12・SDGsと建築デザイン
13・SDGsと教育学 ― 幼児教育
14・SDGsと教育学 ― 学校教育
15・SDGsと薬学
16・SDGsと看護学
17・SDGsと仏教
◎ターミナルケアから見たSDGs

【武蔵野大学出版会販売ページ】 https://mubs.jp/cpt-publication/171/

3 MU SDGs Best Teacher Award
開催と受賞実績について

開催の背景、目的

学生がSDGs科目を学ぶことは、本学の目指す教育を実現していくうえで非常に重要であることから、学生に対し、熱心かつ分かりやすくSDGs科目を教授する教員は、本学にとってのBest Teacherであるとの考えに基づき、2023年度より「MU SDGs Best Teacher Award」を創設した。

受賞者の選定にあたっては、SDGs科目を実際に受講した学生へのアンケート結果を基礎とし、以下の要領で開催している。

開催概要（2023年度）

概　　要	学生にSDGs科目を分かりやすく教授する教員を表彰する。受講後の意識・行動変容の有無や、SDGs科目の学びが、本学での学び全体における意欲の向上につながったと学生自身が判断する場合などについて、当該科目の担当教員を表彰する。
実　施　日	2023年6月～2024年1月末
対　象　科　目	SDGs科目（SDGs基礎ならびにSDGs発展の全ての科目）
選出の観点	1) SDGs科目をとおして世界の現状を認識し、課題や解決策を考えられるようになった 2) SDGs科目をとおして大学の学びへの意欲が高まった 3) SDGs科目をとおして本学のブランドステートメントの理解につながった
投　票　方　法	専用のWebアンケートにより投票する。アンケートはどの「選出の観点」に該当するか（選択式）と、50～100文字以内の推薦理由を記入する。アンケートは常時オープンし通年で投票可能とすることで、学生が参画しやすくし、かつタイムリーな感想の反映を可能とする。
審　査　方　法	学長・副学長・響学開発センター長らによる「審査委員会」を組織する。審査委員会は、アンケートの結果投票の多かった教員（ただし各授業の受講者数を加味し、票数でなく得票の割合で算出）の中から、総合的な審査を行い、受賞者を決定する。

選考結果（2023年度）

2024年4月1日 大学方針説明会での表彰式の様子
左から、宍戸先生、西本学長、高松先生、今福先生

受賞者	シラバス授業概要 抜粋	学生コメント抜粋
経営学科 宍戸 拓人 先生	SDGs発展2 「5.ジェンダー平等を実現しよう」「8.働きがいも経済成長も」の下で、世の中で「女性活躍推進」と呼ばれている経営課題について、実践的な知識や考え方を体得することにあります。講義ではHarvard Business Review日本語版の論文（毎週10～15ページ程度）を読み、その内容について議論します。	●私たちが向き合うべき社会問題についてより深く、わかりやすく説明されてとても良い学修に繋がった。 ●話の内容も、本質的に何を学ばせたくて何を伝えたいのかがわかりやすく、論文を読むのもよかった。
アントレプレナーシップ学科 高松 宏弥 先生	SDGs発展2 SDGs17の項目に関連する動画作品鑑賞や特定地域へのフィールドワークを通して、日本を含めた世界でどのような社会課題が存在しているかを具体的に理解する。その感想や自分だったらどう行動するかを議論し、自らの社会貢献活動につなげられるようにする。	●SDGsの目的しか知識が無かったので今回自分が興味をもった目標からその他の目標までしっかり考えることができた。 ●新しい授業方法、特にリアクションを使ったZoom形式などにより意欲的に授業を受けられた。
幼児教育学科 今福 理博 先生	SDGs基礎 SDGsの諸目標とターゲットから今何を問題として考えるべきか、問題解決のためにはどのような施策が求められるのか、自分たち一人一人には何ができるのか等を、具体的な事例に即してみずから調べ、考え、実践してゆく態度を育む。	●自分たち主体で調べ学習をし、それを見て先生がアドバイスを下さって楽しみながらSDGsについて考えられた授業だった。 ●課題についての発表をグループで行うという取り組みが、自分自身にとって考えや学びを深める機会となった。

4 SDGsに関する教育の実践例

各学科の教育実践紹介

※実施内容は2023年6月取材当時の内容です。

① グローバルスタディーズ

② 多文化共生ソーシャルワーク論／海外ソーシャルワーク実習

③ 海洋ごみに関する課題解決

各学科の取り組み事例

※実施内容や、教員・学生情報は［　］内の取材当時の内容です。

01 学生がタイの山村で国際協力ボランティアに参加
～貯水タンク建設、養蜂箱の製作などの支援活動を実施～［2024年4月］

02 教育学科4年生 岡村 奈々さんが
雑誌「#ナナ先生とアフリカの子どもたちとのスクールlife」を発刊！
～アフリカで小学校教員を経験して得た学びや教育現場のリアルを伝える～［2024年4月］

03 「子ども食堂 おひさまキッチン」で子ども食堂・フードパントリーの活動
～食事だけでなく子どもの「居場所」を作る～［2023年3月］

04 食を通して多様性と持続性を考える地域連携SDGsイベント
～サメ肉専門店・障がい者就労支援施設・学生養蜂プロジェクトチームと協働した取り組み～［2023年3月］

05 建築デザイン学科の学生が
「せとうちの瀬戸際けんちく船の体育館展」を開催
～今ある建築を未来に残すためにできることは？～［2023年2月］

06 互いに支え合う生きやすい社会を目指して
～自殺予防のためのゲートキーパー養成に向けたオンデマンド研修資材開発について～［2022年3月］

07 都市生活でもできる環境活動とは？
都会キャンパスから人と自然を共に豊かにする！
～有明キャンパス屋上での「養蜂活動」の取り組みについて～［2022年3月］

08 合計特殊出生率（TFR）増大のための施策構築に向けて
～TFRの代理変数の開発によって、市区町村（約1,700）別TFRの20年間の推移と特徴を明らかにしました～［2021年5月］

09 大学キャンパスから持続可能な社会づくりを目指すサステナブルキャンパス構想［2020年7月］

10 日英二言語による共同作業を通したSDGs web雑誌の作成と発信
～米国スミス大学とのテレコラボプロジェクト～［2020年7月］

各学科の
教育実践紹介
①

グローバルコミュニケーション学科

グローバルスタディーズ

1 貧困をなくそう
4 質の高い教育をみんなに
5 ジェンダー平等を実現しよう
10 人や国の不平等をなくそう
16 平和と公正をすべての人に
17 パートナーシップで目標を達成しよう

基礎データ

形　態：授業
対　象：2年生後期
受講者数：143名

担当教員：
Zhou Albert R
櫻田 怜佳

全員留学 ＋ 多文化グループワークをとおし、「お互いの違い」を認め、課題を解決する力を獲得！

3行で分かる取り組み概要

- 2年生前期の全員留学で得た学びを基に、各自が関心を持ったSDGs課題（貧困、教育、平和など）を選択し、調査等を実施する。
- 日本人学生と留学生混在のグループ編制によるグループワークやディスカッションを実施する。
- 学科の学びの柱である「ことば・文化・コミュニケーション」を軸に、調査・ディスカッションの成果や提案を学科内でプレゼンテーションする。

どう進める？
何を工夫する？

担当教員に聞いてみた

回答者 Zhou Albert R先生
櫻田 怜佳先生

Q1 グローバルコミュニケーション学科の教育とSDGsの理念を、どのように関連付けていますか？

A. 学科の「学びの柱」がSDGsの理念へとつながる

- グローバルコミュニケーション学科の学びの柱「ことば・文化・コミュニケーション」は、SDGs課題を捉えるうえでの基礎であり、これらの学びが、現代のglobalissueを考察することにつながります。さらに、この考察が「持続可能な社会の構築」へと結実していきます。
- 複言語主義・多文化共生の現代において求められるglobal citizenとしての素質を育成します。授業ではグループ活動における異文化交流を通して、多様な考えや価値観を知り、持続可能な人間関係の構築を目指します。また、グローバルな職場で活躍されている外部講師による講演の機会を通して、日本・アジアの国や人々が持続可能な世界（国際社会）を創るためにどのような貢献をしているかを学びます。

Q2 学生がSDGsを自分ごととして捉えられるよう、どんな工夫をしていますか？

A. ポイントは「身近な問題意識」。自ら問い、考察する

- 2年生前期の全員留学時に学生が**それぞれ肌で感じた課題**について、後期の授業でテーマ設定するよう促しています。（実際に挙げられた課題の例:貧困、ジェンダー、質の高い教育、公平、国際協力など）
- 上記の課題をさらに**時事問題とリンクさせ、自身のバックグラウンドを基に自ら問い考える過程**において、「自分ごと」として考えることができるようになります。

Q3 教員から見て、この取り組みを通し、学生はどう変化・成長したと感じますか？

A. 多様な意見に触れ、広い視野による考察力を獲得

- グループワークやディスカッションは、**日本人学生と留学生混在のグループ**とすることで、各学生は、多様な背景や文化の違いによる考え方の違いをお互いに知ることができます。
- グローバルコミュニケーション学科が目指す英語・中国語・日本語のトライリンガル人材育成の取り組みとして、情報を探す際に、**日本語の情報だけでなく、英語・中国語の情報も**調べることによって、より広い考えを知って、多角的に課題について考えることができるようになっていきます。

Q4 学生がSDGsを学ぶことにより身につけた力は、卒業後社会で活躍していく中で、どのように役立つと思いますか？

A. 他者の違いを認め、発信していくことができる力が身につく

グループディスカッションに際し、**お互いの違いを認識しながら、尊重、思いやり（empathy）を持って、課題の解決を目指し立ち向かっていく力**を醸成した経験は、卒業後いかなる環境においても、**他者との違いを柔軟に受け入れて物事を考え、自分の考えを発信できる力**として役に立つと思います。

各学科の
教育実践紹介
2

社会福祉学科

多文化共生ソーシャルワーク論
海外ソーシャルワーク実習

1 貧困をなくそう
3 すべての人に健康と福祉を
4 質の高い教育をみんなに
5 ジェンダー平等を実現しよう
6 安全な水とトイレを世界中に
10 人や国の不平等をなくそう

基礎データ

形　　態：授業（多文化ソーシャルワーク論・実習）
対　　象：2年生　　受講者数：12名
担当教員：木下 大生、柳　延希

困窮の原因は「個人」だけでなく「社会」にもあると考えることが、「優しい社会づくり」につながる！

3行で分かる取り組み概要

- 様々なゲストスピーカーを招聘し、国籍や文化の違いを超えて、多様性を尊重する意識を涵養。
- 実習では、カンボジアのNPO法人と連携し、現地に渡航して人身売買の被害にあうリスクの高い農村女性の生活に介入。
- 女性が抱える生活課題が緩和・解決に向かうよう、学生がコンサルテーションを実施し、具体的な課題解決策を提案。

どう進める？
何を工夫する？

担当教員に聞いてみた

回答者　木下 大生先生
柳 延希先生

Q1 学生が主体的に活動に取り組めるよう、どんな工夫をしていますか？

A.「生活者としての自分たちへの影響」を考えさせる

- ソーシャルワークでは、個人の良くない状況を、当人の能力や資質などだけに起因すると考えず、社会（環境、成育歴、教育など）にも原因があるのではないかという視点で考えていきます。その中で、課題を抱える人々を支援することにより、**社会にどのように反映されるか**を考えさせるようにしています。
- 例えば、犯罪をしてしまった不遇な境遇の人への支援によって、犯罪に至ることがなくなれば、より安全な社会になって、自分たちも生活しやすくなるというように、**生活者である自分たちへの影響**にもつなげて話をしています。

Q2 教員から見て、この取り組みを通し、学生はどう変化・成長したと感じますか？

A. 課題改善策提案の実践力が身につく

学生は、カンボジア滞在期間中に、課題を抱える女性へのヒアリング、家庭訪問、分析、中間報告等を経て、課題の改善策を提案します。1・2年生で社会福祉の基礎を学んだ上で、こうした実習を行うことにより、**現状を正しく認識**し、**分析**した上で、**課題を改善する提案ができる実践力**が身につき、大きく成長したと感じます。

Q3 学生を指導していくうえで、苦労したことや今後の課題はありますか？

A. 課題は「自分ごと」として捉えられるようになること

LGBTQの人々が抱える生きづらさなど、**授業で学ぶだけでは自分ごととして捉えられない**こともあるので、映画を見て追体験をしたり、当事者のイベントに参加するなどして、学生が少しずつ、自分ごととして考えられるようになる**体験を取り入れて**います。

Q4 学生がSDGsを学ぶことにより身につけた力は、卒業後社会で活躍していく中で、どのように役立つと思いますか？

A.「ソーシャルワークの視点」は優しい社会づくりにつながる

学生には、生活課題を持つ人達は「**個人の努力不足により課題を抱えているわけではい**」という**ソーシャルワークの視点**を持って卒業してほしいと願っています。そうした視点をもって福祉の現場や一般企業で働いていくことは、**より優しい社会づくりにつながって**いくと思います。

各学科の
教育実践紹介
③

環境システム学科

海洋ごみに関する課題解決

14 海の豊かさを守ろう

基礎データ

形　態：授業（環境プロジェクト）　受講者数：10〜20名/毎年
対　象：2〜3年生　担当教員：真名垣 聡

海洋ゴミ回収装置
「Seabin（シービン）」

「失敗」を経て学生が成長！
意義を実感できる活動が「自走するチーム」を作る

3行で分かる取り組み概要

- 「海洋プラスチックラボ」では、企業や財団の協力を得てクラウドファンディングを実施、海洋ごみ回収装置「Seabin（シービン）」を設置。
- 回収装置からの回収物や漂着した海洋プラスチックを科学的に調査。
- 海洋ごみを再利用したアクセサリー制作や、学校等への活動紹介を実施。

どう進める？
何を工夫する？

担当教員に聞いてみた

回答者　真名垣 聡先生

Q1 学生がSDGsを自分ごととして捉え、主体的に活動に取り組めるよう、どんな工夫をしていますか？

A. ポイントは「外部との接点」と学生の「人数」

- 「自分ごと」として取り組ませるために、**外部との接点を作る**ようにしています。例えば、海洋ごみに関心のある企業との協働体制を構築することで、学生は「**自分たちの活動に意味がある**」**と自覚する**ようになります。
- 主体的に取り組ませるためには、学生の「人数」は重要です。**一人一人に役割意識を持たせるため**、必ず5～6名のグループに分かれて行動することとし、責任が分散されないようにします。

Q2 教員から見て、この取り組みを通し、学生はどう変化・成長したと感じますか？

A. 失敗を経験し、「自走する」チームに成長

活動の過程でさまざまな「**失敗**」**を経験し、成長を遂げている**と感じます。例えば、有明近辺の沿岸にシービンを設置する予定だったのが、コロナ禍で、直前で行政側からNGが出されたことがありました。そのようなトラブルに直面し、苦労することを通して、学生は**やがて自走する**ようになります。なお、活動を通して、教員は高所から監督するのではなく、**ともに悩み、考える**ようにしています。その姿勢が、結果的に強固なチームを形成します。

Q3 学生を指導していくうえで、苦労したことや今後の課題はありますか？

A. ズバリ、課題は「お金・人・時間」

「お金」は、1台100万円以上するシービンの購入費などの問題です。学科予算で賄えないため、クラウドファンディングを行うなどの工夫をしています。「人」は、学生が毎年入れ替わることです。「授業」という性質上、上級生からの知見の継承が難しい部分があります。「時間」は、授業時間外の活動が多くなりがちで、参加を強制できないことです。**限られた時間で成果を生むためのスケジューリング**が課題です。

Q4 学生がSDGsを学ぶことにより身につけた力は、卒業後社会で活躍していく中で、どのように役立つと思いますか？

A. スムーズに業務を遂行する力が自ずと身につく

SDGsの知識は必ずしも専門的なスキルでないかもしれませんが、**リベラルアーツのような素養**が身につき、例えば、企業で業務指示を受けた際、その事柄について**自主的に学び、スムーズに遂行する力**が育まれると思います。

取り組み事例 01

学生がタイの山村で国際協力ボランティアに参加

～貯水タンク建設、養蜂箱の製作などの支援活動を実施～

6 安全な水とトイレを世界中に
11 住み続けられるまちづくりを
15 陸の豊かさも守ろう

法学部 法律学科

法学部
法律学科
佐俣 紀仁 Samata Norihito

取組内容

法学部 法律学科 佐俣 紀仁准教授と法律学科3年生 富山 力羅さん、保田 幹太さん、法律学科4年生 長峰 智也さんの活動を紹介します。佐俣准教授と学生3名は、2024年3月10日～20日の間、タイのチエンマイ県内の山岳少数民族カレン族居住集落「バン・マイホエヒア」を訪れ、北タイ・アグロフォレストリー・センター主催の国際協力ボランティアに参加しました。現地では生活用水用のタンク建設、在来種ミツバチ養蜂箱の製作等の支援活動を行いました。

AFCのボランティアに参加した経緯

北タイ・アグロフォレストリー・センター（AFC）は、2023年4月に創設された任意の国際協力ボランティア団体で、タイのメージョー大学と連携して、北タイ山村でのボランティア研修活動を実施しています。この活動が目指すのは、現地住民が望む形で生活の質の改善に貢献すること、同時に、大学生等の参加者の人間的成長を促すことです。これまでに日本の名桜大学や大阪大学の学生がこのボランティア研修活動に参加してきました。今回は、AFCの前身となる活動に佐俣准教授が関わっていた縁で、佐俣准教授とそのゼミ生3名がAFCを通じてタイの山村に滞在しました。

※AFCの活動については次の文献をご参照ください。富田　育磨、ピヤパン・ナンタ、小川　寿美子「ポストCOVID-19における国際ボランティアNGOの再稼働戦略—GONGOVAからAFCへのBuild Back Better」『ボランティア学研究』（国際ボランティア学会）Vol. 24（2024年2月）93頁以下。『国際ボランティア学』の購入・購読については以下のURLより国際ボランティア学会事務局までお問い合わせください。(https://www.isvs.jp/contact)

活動内容

■ 生活用水用のタンク建設

「バン・マイホエヒア（BMHH）」では、山の湧水を直径1.0～1.5インチの塩ビ・パイプで各戸まで引いた簡易的な水道を使用しています。しかしこの水道には、安定した水量を確保しづらいという課題があります。そこでAFCの活動では、水源地と各家庭の中間地点に複数の貯水タンクを建設して、供給水量の安定化を図っています。貯水タンクは、山の斜面を削ってセメントで基礎を作り、その上にコンクリート・リングを積み上げて作ります。現地の専門家の指導の下、村人と学生とが共同して、全て手作業で進めます。

タンク建設の様子

■ 養蜂箱の製作等の支援活動

養蜂は、山村の方々にとって現金収入を得る重要な手段です。AFCでは、希望する村人に、在来種ミツバチ養蜂のための技術研修および養蜂箱の配布等を行っています。今回、学生たちは専門家の指導を受けながら養蜂箱の製作と修理を行いました。これらの作業は、貯水タンク作りと比べると腕力を必要としませんが、養蜂箱としての機能を損なわないような緻密さ（例えば、害虫が入り込まないように隙間を埋める）が求められます。

養蜜箱製作の様子

■ 作業の合間の交流

休憩時間での交流

乾季、北タイの山中の気温は35℃を超えます。体調管理のためには頻繁に休憩をとることが必須でした。この休憩時間が、現地の方々との交流のまたとないチャンスとなりました。作業には現地の老若男女がお手伝いにきています。学生たちは、メモや単語帳を片手に、身振り手振り、時には歌や踊りも交えて、現地の方々との交流を楽しみました。また、夕食後の団らんには、村の子どもたちが遊びにきました。絵を描いたり、折り紙を折ったり、日本語と現地の言語（パガニョー語）を教え合ったりと交流を深めました。

コメント

富山 力羅さん（法学部 法律学科3年生）

未経験の場所で生活することに、最初は不安を感じていました。しかし、少しずつ村の言葉を覚えながら会話を続け、少しずつ馴染んでいきました。貯水タンクや養蜂箱を作るのは、私にとってははじめてのことでした。実際にその村で生活して、これらが村人にとって重要なものなのだと気づきました。現地で必要とされているものを現地の人たちと作ることに、一生懸命取り組めたと感じています。

保田 幹太さん（法学部 法律学科3年生）

村に到着したばかりの頃は、言葉も通じない、未知の場所ということで緊張していていました。しかし、村の人たちは、明るく話しかけてくれたり、一緒にバレーボールをしようと誘ってくれたり、仕事中も色々なコツなどを教えてくれたりと、優しく接して下さいました。おかげで少しずつ緊張もほぐれ、楽しく充実した最高の10日間があっという間に過ぎました。最終的には、村は、ここでずっと生活したいとまで思える場所になっていました。さらに、村を離れる日、村の人たちは涙で別れを惜しみ、「また戻っておいで」と私たちを抱きしめてくれました。改めて、自分たちが村の一員として受け入れてもらえていたのだと実感し、胸がいっぱいになりました。

私は元々休むことが苦手で、いつでも全力で仕事をすることが当たり前だと思っていました。しかし、村の人たちが休みながらも楽しく働く様子を見て、素敵な働き方だなと思いました。自分の中での働き方への考え方もまた、変化していきました。

次回はもっとたくさんのことを学び吸収できるように、そして村の人たちと会話や遊びなどを通して交友を深められるように、タイ語やパガニョー語の勉強を頑張りたいと思います。

長峰 智也さん（法学部 法律学科4年生）

私はこのAFCのボランティア研修活動に参加して自身の成長を実感できました。当初は日本とは全く異なる環境下で、さらに言葉の壁もあり、村に馴染めるか不安がありました。しかし、村の皆さんは言葉のわからない私たちを温かく出迎えてくれて、たくさんの言葉を教えてくれました。また自分からも覚えたパガニョー語を使って積極的に話しに行ったことでさらに交流を深めることができました。村人や、共にAFCに参加した仲間たちと雄大な自然の中、朝昼は汗を流して働き、夜はたくさん語り合ったことで、とても充実した日々を送ることができました。私はこのAFCの活動で、積極性や好奇心を身につけられたと感じていて、参加して本当に良かったと思っています。

佐俣 紀仁 准教授（法学部 法律学科）

AFCの活動では、現地の方々のペースに合わせて、また、彼らが希望する形での発展のあり方を模索するという理念を掲げています。山の恵みや生態系を守りながら（SDGsゴール15）、山村での生活の質を向上させる活動（SDGsゴール6、11）の折々で、山と共に生きるためにカレン族が蓄積してきた知恵や経験（local wisdom）を学ぶことができました。

また、たった1週間強の期間ですが、学生たちはめざましく逞しく成長しました。未知の外国語でのコミュニケーション、さらに普段とは異なる生活環境、多様な価値観に柔軟に適応して、新しい経験への挑戦を日々楽しんでいました。

有意義な経験ほど人を奮起させるものはないと、改めて痛感しました。学生がこうした経験に出会えるような機会を、これからも作っていきたいと思います。

取り組み事例 02

教育学科4年生 岡村 奈々さんが

雑誌「#ナナ先生とアフリカの子どもたちとのスクールlife」を発刊！

～アフリカで小学校教員を経験して得た学びや教育現場のリアルを伝える～

4 質の高い教育をみんなに

教育学部 教育学科

取組内容

教育学科4年生　岡村　奈々さんの取り組みを紹介します。岡村さんは2022年4月から2023年3月までの1年間、大学を休学して南アフリカとガーナで小学校のボランティア教員を務めました。通称「ナナ先生」として子どもたちに勉強を教える中で、アフリカの教育環境を改善するため、学習教材の手配や遠足の実現にも取り組みました。

今回、自身の経験をまとめた雑誌「#ナナ先生とアフリカの子どもたちとのスクールlife」を発刊しました。
ぜひ、ご覧ください。

雑誌はこちら ▶ https://nanaputh.base.shop/

岡村さんに雑誌の制作についてお話を伺いました

■ 雑誌を制作しようと思った理由を教えてください

理由は大きく分けて2つあります。ひとつ目は、この活動で関わった方への恩返しです。アフリカでは、予想外の出来事ばかりが起きて常に自分の中の常識が壊されました。そんな日常を通じて、日本ではきっと知ることがなかった世界を現地の人たちに教えてもらいました。様々な出会いや出来事が自分の生き方を考え直す機会となり、人生のターニングポイントのひとつになったので、その恩返しをしたいと思いました。この雑誌の売り上げは一冊につき500円、私がボランティア教員として関わった小学校へ寄付しています。また、アフリカ滞在時は現地で出会った日本人の方や日本にいる友人に何度も助けられ、支えてもらいました。この経験から、次は自分がこの雑誌をきっかけに、誰かの挑戦を後押ししたいと思いました。

ふたつ目は、自分がアフリカにいた記録をモノとして残したいと思ったからです。今までは都内の小学校や中学校等での講演活動を通じて、自分の活動を2,000人以上の方々に言葉で届けてきました。次はモノとして、これから先も残り続ける雑誌を作りたいと思いました。

■ 雑誌を制作する中で大変だったことを教えてください

出版資金の獲得を目的としたクラウドファンディングが一番大変でした。開始当初は数字がなかなか伸びず、不安に感じることもありました。そこで少しでも多くの人にプロジェクトに注目してもらえるように、行動を可視化して想いをリアルタイムで伝

えることを意識しました。具体的には、東京から大阪までヒッチハイクで行く様子をSNSで発信し、到着した大阪では飲食店で一日店長をしました。また、最終日には支援を呼びかけるチラシを自分の名前である「ナナ」にかけて777枚、駅前で16時間配り続け、プロジェクトにかける想いを直接伝えました。同時期に就職活動や期末テストがあり、体力的にもハードでした。しかし、雑誌を受け取ってもらえた今、多くの人に勇気を届けることができ、感謝の言葉も伝えてもらえたので諦めずにやって良かったなと思います。

また雑誌の限られたページ内で活動内容を誤解のないように伝えることが大変でした。私が見たアフリカはほんの一部に過ぎないので、雑誌を見た人が抱くアフリカの印象を考えながら言葉選びに気を付けて制作を進めました。他にもあらゆる年齢や職業の人たちに読んでもらうため、だれでも楽しめるようなコンテンツになるよう工夫しました。

■ アフリカの教育環境をより良くするためには何が必要だと思いますか

「だれもが挑戦できる環境」が必要だと思います。アフリカの小学校では、子どもたち一人ひとりが夢を持って輝いている印象を受けました。しかし、周りの環境(社会的身分の低さや貧困など)が要因で選択肢や挑戦する環境すら与えられていない状況を目の当たりにしました。この経験から、私は生まれた環境や場所に囚われることなく誰もが挑戦できる世界を創っていきたいと思いました。

■ 雑誌をどのような人に読んでもらいたいですか

- アフリカに興味がある人
- 何かに挑戦したいけど
  なかなか一歩が踏み出せない人
- 行動したいけど何から始めたらいいか悩んでいる人
- 充実した大学生活を送りたい人
  などに読んでもらいたいです。

■ 読者や購入を検討している方へのメッセージをお願いします

この雑誌にはアフリカでの生活を経験した感想や帰国した今もわたしが大切にしているアフリカへの想いを綴りました。「大学生がアフリカで小学校教員」と聞くとどこか、キラキラして充実した人生を送っている、なんかすごい人だ、そう思われるかもしれないです。

しかし実際、アフリカでの生活は波瀾万丈でした。到着から2日目に携帯電話を盗まれたり、2度の交通事故に遭ったり、感染症になったり…。教員をしている上でも、何度も心が折れかけ、学校に行けないくらい悩んだ時期もありました。色々なことに挑戦した分、数え切れないくらい失敗をして落ち込みました。それでも、どんな時もアフリカの子どもたちをはじめ、アフリカで出会った方々、遠く離れた日本にいる友達や家族など沢山の方が支えてくれました。

だから今度はわたしがみんなの力になりたい。アフリカでの経験や学びをより多くの人に届け、皆さんに勇気を与え、アフリカにも恩返しをしていきたいです。雑誌を手に取ってくださった皆さまの日常にちょっぴり彩りを届けられますように。

講演活動の様子

岡村さん(中央)とアフリカの子どもたち

【関連リンク】

クラウドファンディングリンク(終了)：
https://camp-fire.jp/projects/view/676247

取り組み事例

03 「子ども食堂 おひさまキッチン」で子ども食堂・フードパントリーの活動

～食事だけでなく子どもの「居場所」を作る～

1 貧困をなくそう

2 飢餓をゼロに

経営学部 経営学科

教育学部 幼児教育学科

取組内容

経営学部 経営学科4年生小湊 朱莉さん（写真左）、教育学部 幼児教育学科4年生五十嵐 千晴さんの取り組みを紹介します。2人は西東京市にある「子ども食堂 おひさまキッチン」で子ども食堂とフードパントリーの活動を行っています。多くの家庭の拠り所となっているこの場所で2人が取り組んだ子どもへの支援とは?

「子ども食堂 おひさまキッチン」を始めたきっかけと活動内容について

■ 始めた経緯

小湊さん：1年生の時に所属していた人間科学部 社会福祉学科の基礎ゼミナールで、学外の福祉活動に参加し、活動内容を発表する機会がありました。参加する団体を探す中で「子ども食堂 おひさまキッチン」の活動を知り、興味を持ちました。自宅が近かったこともあり、ゼミ終了後も現在まで活動を続けています。

五十嵐さん：私が3年生の時、おひさまキッチンで活動していた幼児教育学科の先輩の卒業発表を聞く機会がありました。発表内で活動の紹介があり、幅広い年齢の子どもと関わることができる点に興味を持ちました。自分が保育士を目指す中でも良い経験になると考え、参加を決めました。

■ 活動内容

子ども食堂

毎週5回、平日（15:00～20:00）に実施しており、子ども（中学生以下）は10円、大人（高校生以上）は300円で夕食を食べることができます。「子どもが1人で夕食を食べる機会（孤食）を減らすこと」を目的に活動しており、学生スタッフは主に調理の補助や配膳、片付け等を担当しています。席数が少ない中、多い時には100人ほどの子どもが集まるため、回転率なども意識しながら活動を行っています。

フードパントリー

月に2回、第2・第4日曜日（11:00～14:00）に実施しています。①児童扶養手当受給者 ②0歳～15歳の児童を扶養している家庭

③西東京市在住の全てに該当する方を対象に、冷凍食品やパンなどの手軽に食べられる物を無償で提供しています。毎月約30組の家庭が訪れます。学生スタッフは食材の陳列や片付け等を担当しています。

■ 活動を行った感想

小湊さん ： 参加以前は子ども食堂について、本当に支援を必要としている子どもが利用する場所という暗いイメージを持っていました。しかし、実際は様々な家庭の子どもが来て食事をしていることが分かりました。子どもたちが笑顔で夕食を食べている姿を見ると、とても嬉しく思います。また、保護者の方とお話をする機会も多く、幅広い方とコミュニケーションをとることは自分の成長にも繋がりました。

五十嵐さん ： 参加前、授業で食事における貧困や孤食の問題について学んでいたため、子ども食堂は様々な事情を抱えた子どもがいる場所だと思っていました。しかし、「おひさまキッチン」はそのような事情の有無に関わらず、子どもや保護者同士が地域を超えて活発に交流する場になっています。コロナ禍で人との繋がりが希薄になっていることもあり、食事をすること以外にも価値のある場所だと思いました。

「居場所」としての子ども食堂

小湊さん ： 活動の中で気づいたことは、施設には単に貧困のために利用する利用者だけでなく、「居場所」を求めてやってくる利用者の方々が多くいることです。夕方に一人で来て閉店時間まで居る子や、赤ちゃんを連れて食べにくるお母さんなど、一見支援を必要としていないように見えて、実際は支援を求めている方も多くいます。また、フードパントリーに来る家庭の中には、スマートフォンなどのインターネットに接続できる機器を持っていない家庭もあります。施設の紹介を主にインターネットやSNSで行っているため、本当の貧困家庭には情報が届いていないことも分かりました。

五十嵐さん ： 遅くまで残っている子どもに「早く帰らなくていいの?」と聞いたときに「お家に帰っても誰もいないから」と言う子がいて、子どもには金銭面に限らず精神的な貧困があることを実感しました。「おひさまキッチン」では誰かと一緒に夕食を食べ、話をすることができます。それが子どもの心の寂しさを軽減していると気づきました。また、施設には自分が使用した食器は自分で洗うというルールがあります。ただ食事を提供するだけでなく、生きていく上で必要なことも伝えられる場になっていることが分かりました。

子どもへの支援として今後取り組んでいきたいこと

小湊さん：今後の目標として、子ども食堂を利用者の「心の拠り所」になる場所にしたいと考えています。多くの子どもは一見、支援を必要としているように見えません。しかし、実は金銭面や精神面などあらゆる貧困を抱えており、支援が必要なケースも多々あります。そのような子どもにとって、少しでも利用しやすく、馴染みのある場所にしていきたいです。また、私は以前クラウドファンディングの支援者を募るためにラジオ局での公開収録に参加したことがあります。その際は目標金額の500万円を達成することができました。この経験から、より多くの人に活動を知ってもらうためにはインターネットに加えてラジオや紙媒体などでも活動を広めることが重要であると考えており、今後も協力していきたいと思っています。

五十嵐さん ： 私は4月から保育士として保育園に就職する予定です。おひさまキッチンで出会ったような「一人で食事をとらなければならない状況にいる子ども」は保育の場にもいるかもしれません。子ども食堂での活動を通してこれらを学んだからこそ、園での食事の時間を大切に考え、丁寧に関わっていきたいと思っています。

【 関連リンク】

子ども食堂おひさまキッチン ： http://ohisama-kitchen.com/

子ども食堂おひさまキッチン インスタグラム ： https://www.instagram.com/ohisamakitchen2018/

子ども食堂おひさまキッチン フェイスブック ： https://www.facebook.com/ohisamakitchen2018/

取り組み事例

04 食を通して多様性と持続性を考える地域連携SDGsイベント

～サメ肉専門店・障がい者就労支援施設・学生養蜂プロジェクトチームと協働した取り組み～

グローバル学部
日本語コミュニケーション学科

工学部 環境システム学科

工学部
環境システム学科
明石 修 Akashi Osamu

グローバル学部
日本語コミュニケーション学科
神吉 宇一 Kamiyoshi Uichi

取組内容

グローバル学部 日本語コミュニケーション学科の神吉 宇一准教授と学生6名が企画し2022年12月12日に実施した「サメとハチがやってくる～食を通して多様性と持続性を考えるSDGsイベント～」の取り組みを紹介します。
今回のSDGsイベントにおける地域連携は、2020年から神吉ゼミが取り組んでいる障がい者アートの市民芸術祭「アートパラ深川」から江東区地域のネットワークが構築され、実現したものです。

取り組むまでの経緯

神吉ゼミの学生(以下、「神吉ゼミ生」)は、2021年に全学の学生を対象にした食の多様性に関する調査を行い、食に制約のある学生は文化や信条といった様々な理由でキャンパス内での飲食が十分にできていないという課題を把握しました。

そこで神吉ゼミ生は「共生社会」、「持続可能な社会」、「誰ひとり取り残さない武蔵野大学」の実現に向けて、学生及び教職員が多面的に食の課題を知るきっかけとなるよう本イベントを企画・実施しました。

取り組み内容について

イベントは「共生社会の実現」「多様性」「持続可能性」をテーマとして掲げ、参加者全員が①本イベントの趣旨やテーマに関する5分のミニレクチャーを受講した後、②各テーマに関する「食」を通して各テーマを体感するという構成で進めました。

※本学しあわせ研究所の助成のもと実施(レクチャーの資料代として200円を参加者から徴収)

■ 多様性・持続性に関するミニレクチャー

当日は用意したパネルを用いて、今回のイベントに賛同した専門店・団体がどのように共生社会、多様性、持続可能性と関連があり、取り組んでいるのかを参加者に紹介しました。また合わせて食の多様性(ベジタリアンの種類、ヴィーガン等)についても紹介し、信条や文化を理由にキャンパス内での飲食に制約を感じている学生がいることを伝えました。

■ 食を通して各テーマを体感

①宮城県気仙沼市の未利用魚サメ肉専門店「SAMEYA」のサメバーガー

日本のサメの9割が水揚げされる宮城県気仙沼市でヒレ以外の部分が活用しきれていない課題に対して、「SAMEYA」が取り

組んでいます。今回、フカヒレ以外の部分が活用しきれていないフードロスについて考えてもらうため、SAMEYAの「サメバーガー」を学生に配付しました。SAMEYAは「多文化」と「海の資源を守る」という思いからキッチンカーで販売を行っており、様々な料理にアレンジ可能なサメ肉のおいしさや価値を体感する機会となりました。

②江東区の社会福祉法人おあしす福祉会「オアシス・プラス」の弁当

オアシス・プラスでは、障がいがあっても地域で当たり前に生活でき、自らの望む人生の実現に向けて歩めるよう、就労継続支援(B型)として弁当の製造・販売をおこなっています。今回、本学有明キャンパスの屋上菜園で栽培した小松菜を使用した特注弁当を用意していただき、配布しました。弁当の売り上げが障がい者に渡ること、弁当製造時に出た生ごみが同菜園の肥料として活用されること、同菜園の野菜が弁当に使われていること、それぞれが循環していることを知ってもらえる機会となりました。

③本学工学部 環境システム学科生のプロジェクトチーム『Rooftop Bee』の養蜂ハチミツ

工学部 環境システム学科では、学生が自ら見つけた課題に対して計画、行動し、実現するといった課題解決型授業「環境プロジェクト」を実施しています。その1つである「Rooftop　Bee」は、環境問題やサステナビリティについて多くの人に広めることを目的に2014年6月からミツバチの生態観察や保護、養蜂活動を有明キャンパス屋上で行っています。今回、採蜜した無添加・非加熱の栄養価が高いはちみつ「やさしい革命」を配布し、都会で人と自然が共に豊かになる関係をサステナブルな方法で築くことができることを知ってもらえる機会としました。

この取り組みを振り返って

■ 神吉 宇一 准教授

食べるってとても大切だと思いますが、そのことに不自由を感じている学生がいて、なんとかしたいよねというのが取り組みの出発点でした。SDGsっていろんな目標がありますが、私自身は「誰ひとり取り残さない」という基本理念がもっとも重要だと思っています。学内に一人しかいない人も取り残されない、そういう大学になるといいなと思っていますし、そういう大学にしていくために、一人ひとりが行動を起こしていくことが重要だと考えています。

今回、おかげさまで学内イベントも大盛況のうちに終えることができました。イベント実施にあたり、多くの方のご協力をいただきました、ここに記して感謝します。ありがとうございました。

■ 和田 啓渡さん(グローバル学部 日本語コミュニケーション学科4年 神吉ゼミ所属学生)

今回、イベントを通して食の多様性を知ってもらうきっかけとしては良かったと感じています。ミニレクチャーの資料だけをもらいに来た学生、他学科から本イベントに携わりたいという思いで運営に協力してくれた学生もいました。これをきっかけに食の多様性について参加者の興味や理解が深まることでマイノリティではない形に変わっていくことができればと思います。

■ 人間科学部 人間科学科2年 イベント参加学生

今回のイベントでは食の多様性について知ることができました。今後、留学生へのボランティアをする際は、留学生の食文化についてももっと興味を持って話してみようと思います。また学内での多文化理解を深めるために、各国をテーマにしたアジアンメニューやハラル食に対応したメニュー等が食堂で提供できれば楽しみながら理解を深めることにつながるのではないかと感じました。

当日、ミニレクチャー受講後に各テーマの食を受け取る様子

【さいごに】　メンバー紹介

グローバル学部 日本語コミュニケーション学科3・4年生
和田 啓渡、水落 圭杜、チョウ カレナ、張 念祖、ズイキン、柳田 裕己采

武蔵野大学 日本語コミュニケーション学科HP：
https://www.musashino-u.ac.jp/academics/faculty/global_studies/japanese_communication/

神吉ゼミX：https://x.com/uichi_zemi

サメ専門キッチンカーSAMEYA HP：https://sameyafoodtruck.wixsite.com/-site

社会福祉法人おあしす福祉会HP：http://www.oasisfukushi.or.jp/

取り組み事例 05

建築デザイン学科の学生が

「せとうちの瀬戸際けんちく 船の体育館展」を開催

～今ある建築を未来に残すためにできることは？～

工学部 建築デザイン学科

工学部
建築デザイン学科
田中 正史 Tanaka Masafumi

取組内容

工学部 建築デザイン学科4年生 福沢 貴博さん、前盛 颯樹さん、浦川 和高さん、塩野谷 淳平さんの取り組みを紹介します。4人は田中 正史 准教授の研究室（以下、田中研究室）で「今ある建築をどのように保存し未来に残していくか」「誰もがずっと使用し続けることのできる建築とは何か」などを問い、社会をより良くするためのデザインについて研究している学生です。今回は研究室での学びを通して「せとうちの瀬戸際けんちく 船の体育館展」の企画、運営を全て学生主体で行いました。

「せとうちの瀬戸際けんちく 船の体育館展」について

「せとうちの瀬戸際けんちく　船の体育館展（以下:展覧会）」は2022年8月16日～21日に高松市美術館で開催されました。「船の体育館」とは1964年に世界的な建築家 丹下 健三氏（1913-2005）により設計された旧香川県立体育館のことを指します。外観のデザインが船の形に似ていることから「船の体育館」と呼ばれ、市民の方の憩いの場として愛され続けてきました。しかし2014年に老朽化のため閉館が決まり、現在も保存や再活用の見通しは立たないままで存続の危機にあります。今回の展覧会では来場者に設計から竣工までの経緯の紹介、体育館の存続活動を行っている「一般社団法人　船の体育館再生の会（以下:再生の会）」による保存活動や現状についての報告を行いました。

「せとうちの瀬戸際けんちく 船の体育館展」開催までの経緯と活動内容について

■田中研究室について

田中准教授の専門は大空間構造です。2021年3月、再生の会から田中准教授に「船の体育館 保存活動」の協力依頼がありました。船の体育館におけるこれまでの活動を整理しながら最新の情報発信することを目的に、研究室として活動することを決定しました。研究室では新しいものを作るだけでなく、今あるものを保存するという視点で建築の研究を行っています。

なぜ船の体育館の保存に興味を持ったのか

福沢さん：4年次のゼミ選択の際に初めて船の体育館の写真を見て、外観のデザインにインパクトがあってすごいなという印象を受けました。その後、自分なりに調べる中で、『保存』という視点から建築を学ぶことに興味を持ちました。建築とは『新しく作り出すこと』として今まで学んできたため、新しい観点での研究に挑戦したいと思いました。

浦川さん：私は香川県出身で、元々船の体育館を知っていたので4年次のゼミ選択以前から田中先生の研究室に興味を持っていました。船の体育館が丹下 健三さんによって設計されたことを知り、価値のある建物を残すことに携わりたいと思いました。

■ 活動内容

研究室に所属した2022年4月に共催者の方から8月の中旬に展覧会を開催したいというお話があり、約4か月間で企画の考案と展示品の制作を行いました。時間がない中での準備となりましたが、関係者の方々や田中准教授と相談しながら、4人で具体的な企画内容を考えました。

展示品の制作は船の体育館を知らない方にも魅力を分かりやすく伝えることを意識して取り組みました。田中准教授から船の体育館について専門的に学び、自分たちの知識と合わせながら建築として特徴的である部分、アピールすべき部分を抜粋して模型や説明パネルなどを制作しました。

船の体育館を設計した丹下 健三氏は、同年に東京都所在の国立代々木競技場 第一体育館（以下：代々木体育館）の設計も手掛けています。代々木体育館は都市にあることから修繕工事が行われ、現在も使用され続けています。しかし、船の体育館は香川県が修繕費を全て負担できないという理由で工事が進みません。制作した年表を通して、2つの体育館の比較も来場者に伝えました。

実際に開催した感想

福沢さん：準備時間が少なかったので展示品や資料の用意が一番大変でした。しかし、当日は制作した展示物やその説明を聞き、来場者の約8割の方が保存活動への署名をしてくださいました。自分たちの活動が船の体育館の保存へ少しでも貢献できたことを嬉しく思います。署名は県に提出します。既に取り壊し決定時期が延長していることから、今回のような活動には影響力があると思っています。今後も活動に携わりたいです。

前盛さん：船の体育館を元々知らなかった方が来場しており、質問を受けたときにこの展覧会が保存活動を広める1つのきっかけになっていることを実感しました。体育館を使用していた人と話す機会もあり、参加してより学びを深めることができました。

浦川さん：実施以前は少しでも多くの方に来場していただき、船の体育館を知ってもらいたいと思いながら準備を進めていました。実際、ニュースや新聞に取り上げていただき、思っていたよりもたくさんの方々に来ていただくことができて嬉しかったです。中には保存に反対する方もいて、船の体育館に対する思いは様々であることを実感しました。

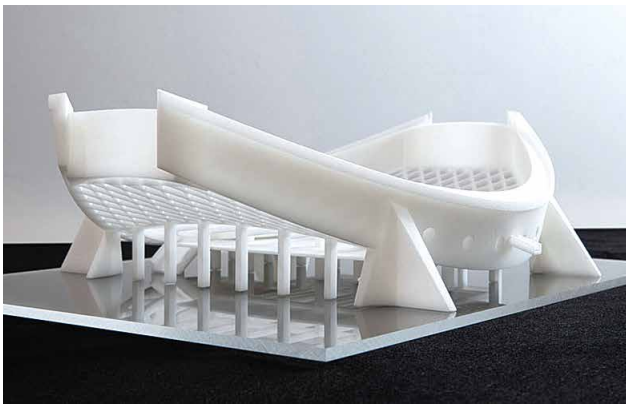
塩野谷さん：現地での活動を通して、香川県民の方たちの意見も賛否両論あることが分かりました。建築を設計して作ることは大変ですが、保存や解体をすることもエネルギーがかかることを知る良い機会となりました。

■ 展示品の紹介

● 3Dプリンターで制作した構造模型（S=1/200）

2014年に船の体育館が閉館したため、内部空間を体験することができない状態になっています。まず、設計図から3Dのデジタル図面を起こし、3Dプリンターで読み込めるような要素に分割しながら、プリンティングの精度を調整する作業を行いました。模型は3つの段階に分けて建設状況の変化がわかるように制作しました。

上から見た構造模型（屋根の取り外しができる）



横から見た構造模型

● 縁梁断面の模型（S=1/5）

写真に示す通り、黄色の人に対する逆三角形断面の縁梁の大きさが良く分かると思います。実際に体育館の中で空間を感じると、まるで壁のように見えます。このスケールを伝えられるように、模型の高さは1.7mあります。断面の黒い点は、コンクリート内部に配置してあるPC鋼材と呼ばれる高強度で作られた特殊な鋼材を表現しています。

● 段ボールの構造模型

船の体育館の競技場から見える風景を体験することができるように、模型の下に人が入ることができる穴を開け、覗くことができる模型を制作しました。

● 年表 香川の近現代建築

第二次世界大戦後の焼け野原となった時代から、高度成長期のモダニズム建築の建設、直島アートプロジェクト※1に始まる瀬戸内国際芸術祭の舞台となる瀬戸内と建築の関係などを年表で紹介しました。

※1：直島（香川県）では島全体をアートで飾るプロジェクトが進められている

● 施工図の復元（左）　● 手書きの構造計算書の展示（右）

船の体育館が設計された1962年は、手書きで図面を作図し、構造計算も方程式を手書きで解きながら安全性を検証していました。当時の構造計算書は約800頁にも及び、特殊な技術における検証方法を学ぶことができます。また施工図の復元は、当時の建設方法だけでなく社会状況を理解する上で貴重な資料を公開することができました。

活動を通して学んだこと、今後取り組んでいきたいこと

福沢さん：活動以前は船の体育館をそのままの形で残していきたいと思っていました。しかし、2024年には近隣に新香川県立体育館が完成予定であるため、保存しても将来は体育館として必要とされないと感じています。建築は使用されることが1番であると考えているため、ただ残すだけでなく必要な形で保存することが大切だと思うようになりました。

前盛さん：展覧会を通じて、価値や歴史のある建物を保存、解体するにはどちらにしても良いところと悪いところがあると実感し、建築物の将来を考えることの難しさを学びました。船の体育館は設計された時代だからこそ実現できた構造「モダニズム」に特徴があります。私はこの価値を活かしつつ、現代のニーズに適する形で残していくことが最善であると考えています。

浦川さん：今回の展示会が船の体育館を多くの人に知っていただく機会になり、行動することの大切さを学びました。今後も自ら行動することを大切にしていきたいです。そして、少しでも人に影響を与えることができたらと思っています。

塩野谷さん：展覧会の活動を通して、建築という専門知識だけでなく幅広い視野を学ぶ必要があることを実感しました。我々の暮らす社会では、誰もが建築に関わりながら生活しています。人の思いと建築のよい関係を見つけていきたいと思うようになりました。

今あるものを未来に残していくためには

福沢さん：活動を通して、自分が生産者の立場に立ったときには長期的に使用してもらえるものや、誰かに影響を与えるものを未来に残さないといけないなと思いました。そのため、卒業制作のテーマを「多くの人に使ってもらえるもの」として進めました。卒業後は建設業に携わる中で技術を身につけ、船の体育館をはじめとした今ある建築の保存・改修に貢献したいです。

前盛さん：既存の建築物を未来に残すことも大切ですが、解体する際にはその一部をリサイクルできないかと考えることも大切であると思っています。ごみを減らすことに加え、建築基準法の改正によって現代では再現できない建築構造を未来に残すことは重要であると思います。

浦川さん：バンクシーの描いた絵のように、ただ街に落書きをしたものが人々の注目を集め、価値あるものになることがあります。そのような絵は消されません。価値や歴史のある建築物も同じように、多くの人に認知され、存在し続けることが望ましいと思っています。

授与式の様子（左から西本学長、前盛さん、福沢さん）

塩野谷さん：初めて香川県を訪れて感じたことは、昔ながらの美しい景色が残っていることでした。建築は固有の敷地に対して設計され、その風土や景観とともに使われ続けることがとても幸せではないかと思います。これからは環境と人の関わりを理解し、建築を通じて未来に貢献したいです。

4人は2022年10月7日、「Creating Happiness賞」を受賞しました。この賞は2016年に大学ブランドの発表と武蔵野大学しあわせ研究所の設立を機に創設された賞で、日々の生活の中で実際に幸せをカタチにした教職員や学生に贈られるものです。

取り組み事例

06 互いに支え合う生きやすい社会を目指して

～自殺予防のためのゲートキーパー養成に向けたオンデマンド研修資材開発について～

3 すべての人に健康と福祉を

人間科学部 社会福祉学科

人間科学部
社会福祉学科
小髙 真美 Kodaka Manami

自殺予防のためのゲートキーパーとは？

この取り組みは、人間科学部 社会福祉学科の小髙 真美 准教授が現在取り組んでいる研究です。自殺予防のためのゲートキーパーとは、自殺のリスクを抱えた人々に気づき適切にかかわる人のことをいいます。自殺に至る原因は、心理的、社会的問題や生活上の問題、健康上の問題など複数が絡み合い、人によってさまざまです。

自殺対策では、悩んでいる人に寄り添い、関わりを通して「孤独・孤立」を防ぎ、支援することが重要です。ゲートキーパーとして活動するために特別な資格は必要ありません。地域のかかりつけの医師や保健師などをはじめ、行政や関係機関、ボランティア、家族や同僚、友人といったさまざまな立場の人たちがゲートキーパーの役割を担うこと、誰か特別な人ではなく私たち一人ひとりが「ゲートキーパー」となることが期待されています。

取り組みへの経緯

数年前、全国の自治体ではどの程度、自殺予防のためのゲートキーパーを養成する研修が行われているのかを明らかにする調査を行いました。その結果、都道府県や政令指定都市では、ほぼ100パーセントに近い自治体が研修を毎年行っていること、一方でその内容が標準化されていないことがわかりました。

標準化されていないということは、本当にゲートキーパーとして必要な知識やスキルを身につけるための研修内容が提供されているのだろうかと疑問を抱いたことが、この取り組みへのきっかけとなりました。研修内容にばらつきがあると、研修の効果を一定の基準で評価することも難しくなります。

取り組み内容について

■ ゲートキーパー研修のオンデマンド化について

はじめは対面研修の標準化を考えました。ゲートキーパーとして必要な知識・スキルを抽出するため、この領域のエキスパート（専門家）にデルファイ法（※）という手法を用いて調査をし、その方々のコンセンサスのもと、ゲートキーパーに必要な最小限

の知識やスキルだと考えられるものを抽出しました。

※対象のテーマや設問について参加者に個別に回答してもらい、得られた結果をフィードバックして他の参加者の意見を見てもらった後、再度同じテーマについて回答してもらうこと

さらにその研究をベースに組み立てた研修を、いくつかの自治体で実施し、研修前と後の受講者の知識やスキルについて測定して比較することで、研修の効果を検討しました。研修には一定の効果があることを確認し、まずは自殺予防のためのゲートキーパーとして、最低最小限の知識とスキルを身につけるための科学的根拠に基づいた研修内容を構築しました。

そして今回、コロナ禍において対面研修が難しくなったことで、非対面で研修が受けられるオンデマンド研修が有用だと考え、オンデマンド用の研修資材を制作しました。

■ オンデマンド研修の内容について

今回、開発したオンデマンド研修は、気軽に「ちょっと見てみようか」と思っていただけるように、全体の動画を30分程度におさえています。そのため、動画を見ただけで自殺予防に対しての知識がすごく増える、スキルに自信がつくといった内容よりも、「ゲートキーパー」というものを理解してもらい、「私にもできそう」と、まず最初の一歩を踏み出してもらうことに重きを置いています。

オンデマンド動画では対応例をわかりやすく説明している

武蔵野大学大学院生（左）の協力も得て、オンデマンド動画を制作した

自殺の問題は、特別な人に起きるわけではありません。「誰にでも起こりうることなんじゃないか」「誰にでも自殺を考えている人に巡り合うことがあるんじゃないか」という意識づけをオンデマンド研修によって図れればと考えています。

自殺予防のためのゲートキーパーを養成することは、深刻な悩みを抱えた人たちを一人で責任を負って支援するのではなく、みんなで協力し合える支援体制を作るための一つの方法です。**どんなに支援をしたとしても自殺は100パーセント防ぐことができない場合もあります。その点も踏まえ、自分自身のケアや、自殺で大切な人を失った方への支援も重要であることも、研修の中でメッセージとして伝えています。**

SDGsにおける「自殺予防のためのゲートキーパー研修のオンデマンド化」の役割について

今回の取り組みは、SDGsの「3. すべての人に健康と福祉を」にあたります。生きやすい社会をつくるという意味でいえば「誰一人とり残さない」というSDGsへの取り組みそのものが自殺対策につながるでしょう。

厚労省の調査*では、4人に1人くらいは「人生の中で一度は死にたいと思ったことがある」と答えています。死にたいと思うこと自体が問題なのではなく、死にたいと思った人がそれを言えない、言ったとしても受け止められない社会自体が問題なのではないのでしょうか。 *自殺対策に関する意識調査について（2016年10月実施）

もちろん、このゲートキーパー研修だけで、自殺者を劇的に減らすことができるとは思いません。人々の生きづらさに気づいて適切に関わる人を一人ずつ増やしていくことが大切だと考えます。ゲートキーパーの役割を果たした人が、次は反対に悩みを打ち明ける立場になることもあるでしょう。ですから先に述べた通り、私たち一人ひとりが「ゲートキーパー」なのです。

今後、ゲートキーパー研修を通して最低限の知識がちゃんと増えるのか、何か問題は起きないのか、その有用性をみながら、受講者のゲートキーパーとしての行動変容も視野に入れた調査へ展開を進めていきたいと考えています。

【さいごに】 相談機関などはこちらから検索できます。

厚生労働省：自殺対策 相談先一覧 ：
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/jisatsu/soudan_info.html

取り組み事例 07

都市生活でもできる環境活動とは？

都会キャンパスから人と自然を共に豊かにする！

～ 有明キャンパス屋上での「養蜂活動」の取り組みについて ～

工学部 環境システム学科

工学部
環境システム学科
明石 修 Akashi Osamu

取組内容

工学部 環境システム学科生が行っている有明キャンパス屋上での養蜂活動「Rooftop Bee」の取り組みについて紹介します。環境システム学科では、学生が自ら見つけた課題に対して計画、行動し、実現するといった課題解決型授業「環境プロジェクト」を行っており、6つのラボを中心に環境問題に関する活動を学生主体で実施しています。(※2021年度時点)

その一つである『U.P.Lab』(Urban Permaculture Lab)は、明石 修 准教授と学生32人がアーバンパーマカルチャー(都会で人と自然が共に豊かになる関係を持続可能な方法で築いていくこと)をテーマとして掲げ、環境問題やアーバンパーマカルチャーについて多くの人に広めることを目的に、ミツバチの生態観察や保護、養蜂活動、無農薬野菜の栽培等の活動を行っています。

U.P.Labの様子

養蜂活動チーム「Rooftop Bee」は2年生4名、3年生4名の計8名(2022年2月現在)が有明キャンパス屋上での養蜂活動を通して、ミツバチの保護及び生態系の重要性・環境問題における都市の役割やその可能性について発信しています。

Rooftop Beeが養蜂するミツバチ

同じ屋上で同ラボの別チームが無農薬野菜の栽培も行う

取り組みの経緯

2013年に生態系保全に関心のある4名の学生のグループが、都会でできる生態系保全のアクションを起こそうと考えたことがきっかけです。

はじめは、公園のリスの保全なども考えたのですが、より広く生態系を保全するために何ができるか調べていくうちに、花粉を媒介して植物の受粉を助けるミツバチを育てるのが良いのではないかということに気が付きました。その後、養蜂家の活動見学や勉強会などを重ね、養蜂技術を自分たちで学び、学内で養蜂を行うための企画書を作成し、2014年6月に養蜂活動を開始しました。

養蜂は都市のような人工的環境では難しいと思われがちですが、実は都市は蜜源となる街路樹が多くあり養蜂に適した環境です。埋立地である有明、さらには大学キャンパスの屋上という環境で順調に活動を続けています。

屋上で活動している様子

夏には草が生い茂るため、学生が伐採作業も行う

取り組み内容について

屋上に設置した巣箱でミツバチの飼育をしています。例年5月～7月に採蜜し、商品化、また販売を通して、養蜂活動や環境問題についてのPR活動を行っています。

■ ミツバチの飼育

ミツバチが蜜を集めてくるのは、人間のためではなくその蜜でミツバチが生きていくためです。1年を通してミツバチが問題なく生育することで、私たちは蜜を採取し、その恩恵を受けることができます。

また、ミツバチが蜜を集めるための蜜源植物は、巣箱から約3～4kmの範囲になります。ミツバチが蜜を集めるために飛び回ることで、植物の受粉が進み周辺地域の植物が育まれ自然環境が豊かになります。

基本は、週1回「内検」といわれる巣箱の点検とミツバチの世話が主な活動になります。内検ではミツバチに異常がないかを確認し、状況に応じて生育環境を整えます。

屋上に設置している巣箱

養蜂していくうちにミツバチへの愛着も湧き、ミツバチをみるたびにかわいいという声が聞かれた

内検の様子

冬の時期、ミツバチは蜜を採集せず、巣箱の中で越冬します。巣箱を開けると気温が下がるため、巣箱は15度以上でなければ開けられません。内検では、蜜の代わりに糖液という砂糖水を与えてミツバチの生育をサポートします。また巣箱の重さが変わっていないかなど、1カ月に1～2回確かめます。その他の時間では、春に採蜜したはちみつを商品化する準備をします。

『やさしい革命』160g 1,300円／100g 900円

■ 採蜜したはちみつの商品化

2021年は、約50kgのはちみつを採蜜できました。添加物、着色料、保存料、人工甘味料を一切使用しておらず、非加熱であるため、自然のままの栄養価の高いはちみつの味わいや香りが特徴です。

採取したはちみつは『やさしい革命』というブランドで、無印良品　東京有明や青山ファーマーズマーケットにて期間限定で販売しました。

環境負荷を減らした、都会で生産できる地産地消の商品になっています。販売を通して、有明周辺に住んでいる方から「蜜源植物を植えました」などの声を聞いたり、次の販売予定について聞かれることもあり、この養蜂活動を通して環境問題に興味を持ってくださる方が少しずつ増えていると実感しています。

無印良品での販売の様子

青山ファーマーズマーケットでの販売の様子

養蜂活動という取り組みを通して実感していること

明石 修 准教授

都市養蜂はSDGsの掲げる持続可能な社会づくりにとても貢献できる活動だと感じています。自然生態系の保全だけでなく、地域づくりに活かしたり、持続可能なライフスタイルの提案などにつなげることができます。今後も、環境と社会の持続可能性を高める活動としてプロジェクトを展開していきたいと思います。

学生：矢田 萌子さん

人間が暮らしていけるのは、やはり自然が酸素を作ってくれたり微生物がいてくれたり、さまざまな動植物から恩恵を受けているからだと思います。養蜂活動を通して生態系や生物保護について興味が深まり、今後はさまざまな生物を保護する仕事や活動に携わっていけたらと思っています。

学生：松葉 実優さん

環境問題も何も結果が得られないまま続けていくのは、持続可能的でないように思っていました。Rooftop Beeの活動で地産地消の事例に取り組んでいることを知って、作ったはちみつを買ってもらうだけでも一歩前に進むことができると思いました。この活動を通して、環境問題を自分事化でき、ゴミの分別など日常生活でも問題意識を持てるようになりました。

学生：須藤 蓮さん

養蜂活動を通して、はちみつを採取したり、地産地消の商品としてお店で販売するなど、貴重な経験ができました。はちみつの商品化の場面では、人手が必要なこともわかりました。今後は、社会福祉と養蜂活動とをつなげて、障がいのある方の就労支援としても養蜂活動をもっと広めていけたらと考えています。

学生：福留 友希さん

ミツバチが都会でも生きていけることや、そもそも人間がミツバチから受けているさまざま恩恵について発信していきたいです。多くの人に知ってもらうことで、蜜源植物を植えるなどの行動を起こしてもらえたらいいなと思います。養蜂活動を通して、自然林が増えてそこでミツバチが元気に生活できればその周辺の自然が豊かになっていくことを学んだので、自然林をどのように増やしていけるかについて今後考えていきたいと思っています。

【さいごに】　■ メンバー紹介

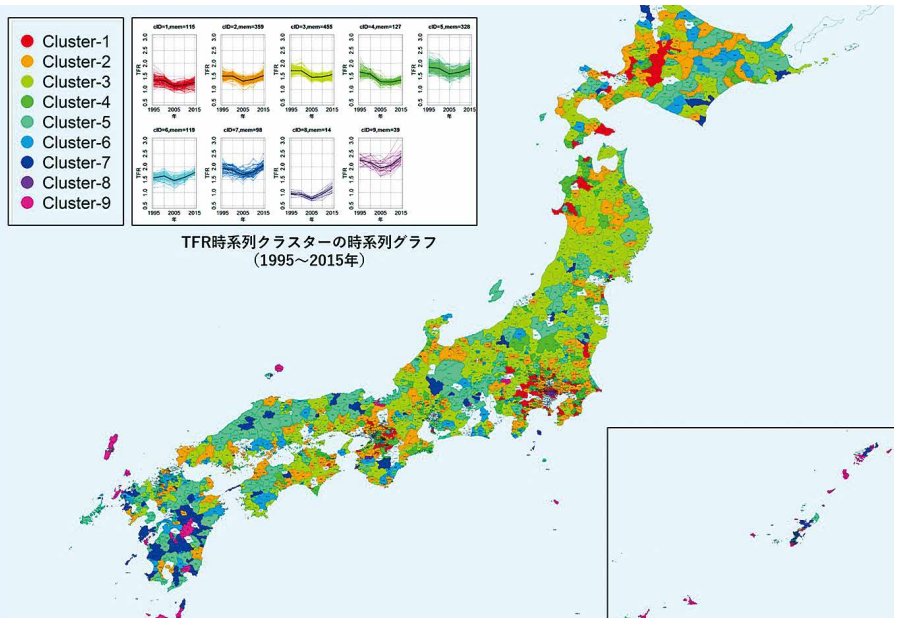
仁科 初音、小笠原 七海、矢田 萌子、松葉 実優、須藤 蓮、福留 友希、長谷川 璃成、添田 玲菜

武蔵野大学 工学部 環境システム学科 ホームページ：
https://www.musashino-u.ac.jp/academics/faculty/engineering/environmental_systems_sciences/
武蔵野大学「環境／サステナビリティ｜トピックス」： https://esg.musashino-u.ac.jp/archive/
武蔵野大学「環境／サステナビリティ｜プロジェクト」： https://esg.musashino-u.ac.jp/pj/

取り組み事例

08 合計特殊出生率(TFR)増大のための施策構築に向けて

～TFRの代理変数の開発によって、市区町村(約1,700)別TFRの20年間の推移と特徴を明らかにしました～



TFR時系列クラスターの時系列グラフ
(1995～2015年)

5 ジェンダー平等を実現しよう
4 質の高い教育をみんなに
8 働きがいも経済成長も
10 人や国の不平等をなくそう

工学部 数理工学科

工学部
数理工学科
西川 哲夫 Nishikawa Tetsuo

取組内容

この取り組みは、工学部 数理工学科の西川 哲夫 教授と学生3名による、独立行政法人統計センター主催(総務省共催)の「統計データ分析コンペティション2019」における活動です。
「統計データ分析コンペティション2019」は高校生、大学生等を対象に、地域別の統計をまとめたSSDSE(教育用標準データセット)を用いた統計データ分析の論文を募集し、そのアイデアと解析力を競うコンペティションです。
同コンペティションにおいて、数理工学科の学科生3名が提出した「市区町村別でみる合計特殊出生率推移の特徴分析」と題した論文が「統計活用奨励賞」(統計協会賞)を受賞しました。本論文は少子化問題への貢献を目指して、合計特殊出生率(以下:TFR)推移の現状を地域ごとに把握し、より有効な政策提案を可能にすることを目的として提案したものです。

また本論文は、日本統計協会の月刊誌「統計」2020年6月号に掲載されました。

2019年度統計データ分析コンペティション表彰式にて

統計活用奨励賞の表彰状

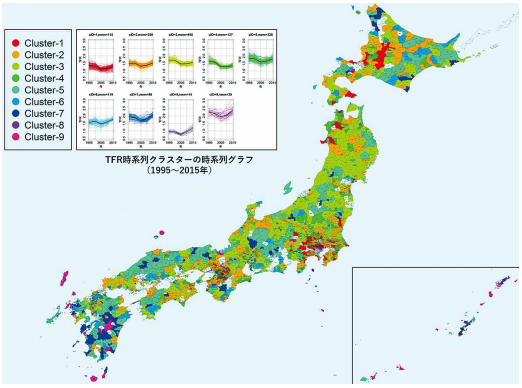
論文テーマ選定経緯

2016年12月、全閣僚を構成員とする「持続可能な開発目標(SDGs)推進本部」は、日本としてのビジョンや8つの優先課題が示された「持続可能な開発目標(SDGs)実施指針」を策定しました。持続可能な開発目標(SDGs)を達成するための具体的施策(付表)によれば、「一億総活躍社会の実現:夢をつむぐ子育て支援」において、2025年度までに「希望出生率:1.8」を実現する目標を掲げています。しかし2019年のTFRは1.36であり、目標に対して大きな差異があります。

そこで私達は、持続可能な開発のためには人口の維持が必須であると考え、少子化問題への貢献を目指した検討を開始し、少子化のパラメータであるTFRのこれまでの時系列的な変化に着目しました。

取り組み内容について

TFRに影響を与える因子は無数にあり、TFRの値を、人口、経済、医療、福祉、教育分野などから着目する分野の複数の変数の線形和によって近似する分析の試みがこれまで多く研究されてきました。しかしこれらの分析では都道府県ごとのデータを用いる場合が多く、データ数に対して考慮すべき変数が多いことから、十分な研究成果が得られていませんでした。また都道府県ごとではなく、都道府県内の地域差の情報も含みデータ数が約1,700と大量にある市区町村ごとのデータを用いることを検討しましたが、市区町村別の全国規模でのTFRの数値は最新のものも含め、十分に公開されておらず、使用できるデータがありませんでした。



TFRC時系列クラスターを日本地図にマッピングした様子
（数理工学科紀要より一部改変）

そこで私たちは使用できるデータを自ら開発することを考えました。「子ども女性比*」という変数に少し手を加えることで、TFRの近似値として使えることを示した上で子ども女性比を用いた新しいTFRの代理変数:TFRCを導入し、約1,700の市区町村別にTFRCの1995年から2015年にわたる時系列を得ることができました。その後、これらの時系列を用いて各市区町村の分類を行い、分類ごとに日本列島上にどのように分布しているかを調べ、その特徴を明らかにしました。

*子ども女性比…15-44 歳女性人口に対する 0-4 歳人口の比

審査委員長の椿 広計 統計数理研究所所長より、記念品を授与

本論文に対して、審査委員長の椿 広計 統計数理研究所所長より「本論文で新しく開発した『合計特殊出生率（TFR）の簡便推定方式』を導くプロセスが実に秀逸であり、TFRの時空間変化の考察もスマートで好感が持てるものであり、追加的検討により政策に寄与する本格研究に育つ可能性が高い」というお褒めの言葉をいただきました。

SDGsの目標に対して、本活動を通して実感したこと

SDGsの施策目標を達成するためにまず必要なのは、正確で詳細な現状分析だと考えますが、それをきちんとやることはそう簡単ではないことをまず思い知らされました。TFRに関していえば長い間未解決の大きな問題であり、すでに膨大な数の研究が実施されています。そのため一体どこまで研究され、どこまで分析・解明されており、何がなされていないのかについて、ある程度理解するまでが大変でした。分担して勉強を重ね、市区町村ごとの分析が今後必要だと分かり、データが公開されていないことに気付きました。

SDGsは17の目標と169のターゲットで構成されている

このような場合、データが使える別のテーマに移っていくのが恐らく普通の考え方ですが、そこであきらめず、しつこく調査を続けたことが良かったと思っています。今回、市区町村レベルの網羅的分析や新しい変数の発想にたどり着けたのは、ヒトゲノム解析という巨大で全く新しい対象にかつて挑んできたという経験が生きたのかもしれません。ある分野での課題に、その分野で用いられている知識や手法だけでうまくいかないとき、別の分野での発想を持ち込むことで、新しい展開が生まれる時があると感じます。

このような代理変数を探していくアプローチは、あまり聞いたことがなかったので、審査員の先生方に果たしてその方法が評価してもらえるだろうかと半信半疑でした。その後、椿審査委員長から「合計特殊出生率（TFR）の簡便推定方式を導くプロセスが実に秀逸」という評価をいただいて、私達の考え方は認めてもらえたと嬉しく思うと同時に、今後もあまり常識を気にすることなく思うままに攻めていこうという勇気が湧きました。

以上で述べたような分野の枠を超えた発想は、SDGsのどの分野の施策を推進する際にも必要になってくるのではないでしょうか。またSDGsの目標は形の上では17に細分化されていますが、SDGsのあらゆる分野や施策はそれらの影響が互いに絡み合っているのではないでしょうか。そうだとすると個々の分野・施策だけをみるのではなく、同時に複数の分野や施策に着目した施策も必要な気がします。

取り組み事例 09

大学キャンパスから持続可能な社会づくりを目指すサステナブルキャンパス構想

工学部 環境システム学科

工学部
環境システム学科
明石 修 Akashi Osamu

SDGsではTransforming our worldを合言葉に、持続可能な社会への変革が求められています。「世界の幸せをカタチにする。」をビジョンとする武蔵野大学において、足元からサステナビリティ(持続可能性)の達成を目指す取り組みとして「武蔵野大学サステナブルキャンパスプロジェクト」は立ち上がりました。このプロジェクトでは、気候変動や資源・廃棄物問題など世界の抱える問題を克服するための具体的アクションを大学キャンパスで行っていきます。イメージは「持続可能な社会における大学キャンパス」です。持続可能な社会において大学キャンパスはどのような姿をしているかをイメージし、そこに向かうアクションを展開していきます。

現在は、SDGsの「4.質の高い教育をみんなに」「7.エネルギーをみんなにそしてクリーンに」「12.つくる責任つかう責任」「13.気候変動に具体的対策を」の4つのSDGsのゴールを目標に活動を行っています。

その基盤となるのが『エコロジカルフットプリント　プロジェクト』です。大学キャンパスや学生生活で使用するエネルギーやモノ・サービス(エネルギー、食、ペットボトル、紙など)に伴う環境負荷(CO_2排出量など)を分析し、サステナブルキャンパス化に向けた課題を抽出し、数値やグラフィックで分かりやすく見える化します。

『RE100 プロジェクト』では、キャンパスで使用するエネルギーの100%再生可能エネルギー化、二酸化炭素排出量の大幅削減を目標とし、省エネ(空調、照明などの最適化)、創エネ(太陽光パネルの設置)、再生可能エネルギーへの転換について、技術、経済、制度などの面から分析し、実現可能なアクションプランを策定し、実現を目指します。

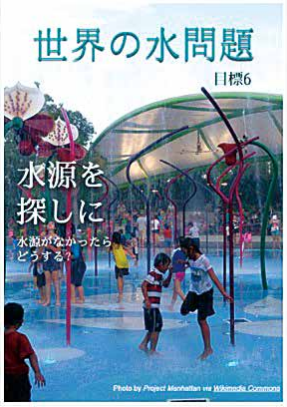
『食の循環 プロジェクト』は、都市型キャンパスにおける健康的で自然共生的なキャンパスライフを実現することを目的として、キャンパス屋上をコミュニティガーデンとして整備し、そこで無農薬・無化学肥料の野菜の栽培や養蜂を行っています。収穫した野菜やはちみつは大学内のロハスカフェでオリジナルメニューとして提供しています。また、ロハスカフェで出る野菜くずや近隣地域の落ち葉を堆肥化利用するなど、地産地消で資源の循環を行っています。

現在は環境システム学科の研究室(教員と学生)を中心にこれらの取り組みを行っていますが、今後全学的な取り組みとして発展させていく予定です。

取り組み事例

10 日英二言語による共同作業を通したSDGs web雑誌の作成と発信

～米国スミス大学とのテレコラボプロジェクト～



グローバル学部
日本語コミュニケーション学科
言語文化研究科

グローバル学部
日本語コミュニケーション学科
神吉 宇一 Kamiyoshi Uichi

米国のスミス大学で外国語科目として日本語を履修している学部生と武蔵野大学グローバル学部 日本語コミュニケーション学科神吉ゼミ3年生および大学院言語文化研究科の学生が、日英二言語でSDGsについて一緒に話し合い、考え、調査し、web雑誌を作成してweb上で発信を行いました。

日本語コミュニケーション学科は日本語と外国語によるコミュニケーションを通した社会参加や課題解決を重視していることから、「SDGs×学科・研究科の専門性」を考え、日本語と英語の二言語を使用し取り組むことにしました。

この活動では、SDGsの17の目標の中から、グループで最も興味のあるテーマを選び(2つ以上の組み合わせも可)、そのテーマに関係のある自分たちの身近にある問題について調べ、わかったことや目標を達成するために自分たちでできることを考え、協働でウェブマガジンを作ります。

実施目的は以下の3点です。

(1) 保持している言語・文化、社会的背景等が異なる学生同士でSDGsを共通テーマとして協働作業を行うことで、世界の課題解決に向けて協力して取り組むことを，自分たちのできる範囲で実現する。

(2) 日英の二言語でプロジェクトを行うことによって、日英それぞれの学生たちの外国語使用機会を増やすとともに、外国語能力の向上と洗練を図る。

(3) SDGsについて調べ、まとめ、web発信することで、世界のより多くの人たちに課題の存在とその解決の必要性を訴える機会を作る。

この活動を通して、計5種類総計99ページのweb雑誌を作成しました。
2020年度は2019年度の経験を生かし、さらに学びの質を高めて同様の取り組みを継続していく予定です。

5 Musashino SDGs Award
開催と受賞実績について

開催の背景、目的

本学のブランドステートメント「世界の幸せをカタチにする。」は、SDGsが目指すことと軌を一にするものである。「世界の幸せをカタチにする。」を実践する一つの方法として、SDGsを自分事化し、身近な社会環境問題の改善に貢献する優れた取り組みを表彰する「Musashino SDGs Award」を2018年度より実施している。

開催概要

目　　的　身近な社会環境問題の改善に貢献することがSDGs 17の目標の達成につながることを理解し、本学のブランドステートメントが世界とつながっていることを実感した上で、SDGsを自分事化して“世界の幸せをカタチにする”取り組みを促進する。

応募内容　応募者（グループも可）が、SDGs 17の目標のいずれかに関係する社会問題を取り上げ、身近な問題として自分事化し、その解決に取り組んだ活動内容ならびに成果（途中経過も可）。

条　　件
- 応募に際して、SDGs 17の目標のどれに該当するのかを明記すること
- 取り組みの成果は数量化して示すこと
- 途中経過の場合は申請時点までの成果及び最終目標を示すこと
- 表彰式に参加できること
- 指定の応募様式を用いて、期日までに事務局に提出すること

応募対象　武蔵野大学に所属する大学生ならびに教職員

選考結果

2018年度 第1回

受賞内容	受賞者名	所　属	取り組み内容	SDGsアジェンダ
最優秀賞	王 雨軒 連　錦	グローバル学部 日本語コミュニケーション学科3年	外国にルーツを持つ子どもの現状を国際結婚した夫婦に教え、親の意識を変えることで子どもの教育を支援する。	4. 質の高い教育をみんなに
優秀賞	長谷川 秀夫	グローバル学部 グローバルビジネス学科教員	発達障害者就労支援事業のサポート	3. すべての人に健康と福祉を
優秀賞	小林 久美子	環境学研究科 環境マネジメント専攻 修士課程2年	食品製造小売店の副次的余剰食材を再商品化し、販売。 事業系食品廃棄物の排出抑制を行った。	12. つくる責任 つかう責任
優秀賞	ANGELA LUSTRE 李 嘉昇 ASMITA PULAMI MAGAR 後藤 和寿 JOSEPH　BACLEON	グローバル学部 グローバルビジネス学科3年	Reducing, Reusing and Recycling Plastic Wastes	14. 海の豊かさを守ろう
優秀賞	NGUYEN THU UYEN HOANG THI TRONG NHAN	グローバル学部 日本語コミュニケーション学科3年	ベトナム人留学生・実習生向け日本語勉強コミュニティでスピーチコンテストを行った。	4. 質の高い教育をみんなに
奨励賞	千嶋 優香	グローバル学部 日本語コミュニケーション学科3年	沖縄県辺野古新基地建設工事停止に関する米ホワイトハウスへの嘆願・署名活動に参加した。	11. 住み続けられるまちづくりを 16. 平和と公正をすべての人に
奨励賞	TRAN THI THUY LINH	グローバル学部 日本語コミュニケーション学科3年	環境問題の共通理解を目指し、Facebookでホームページを作成し、人材集めの企画を実行した。	13. 気候変動に具体的な対策を
奨励賞	中井 穂乃花	グローバル学部 日本語コミュニケーション学科3年	節水・節電・ごみ分別を行いエネルギー消費の削減を行った。	7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに 13. 気候変動に具体的な対策を
奨励賞	山口 莉穂	グローバル学部 日本語コミュニケーション学科3年	災害時の食料不足の事態を飢餓と捉え、食料が不足してしまわないための避難用品を用意する。	2. 飢餓をゼロに
奨励賞	林 子昊 タン エンニ	グローバル学部 日本語コミュニケーション学科3年	アルバイト先において「割り箸をやめましょう」というアンケート調査と活動を行った。	15. 陸の豊かさも守ろう
奨励賞	横野 活輝	工学部 環境システム学科3年	大学周辺(お台場・有明地区)の水質及び生態調査を行い、食を通じて東京湾の自然環境や地域の歴史や物語を知ってもらう機会の提供を行った。	11. 住み続けられるまちづくりを 14. 海の豊かさを守ろう

2019年度 第2回

受賞内容	受賞者名	所　属	取り組み内容	SDGsアジェンダ
最優秀賞	小林 柊斗 秋山 真緒	工学部 環境システム学科2年 工学部 環境システム学科2年	コミュニティ菜園による タワーマンションでの地域のつながり形成	2. 飢餓をゼロに 11. 住み続けられるまちづくりを
優秀賞	Rachel Faun Kar Mun Dwinyta Nudialysha	グローバル学部 グローバルビジネス学科3年 グローバル学部 グローバルビジネス学科3年	“The Foodie App”: Reducing Food Loss in Japan	12. つくる責任 つかう責任
優秀賞	神吉 宇一 小松 瑠南 浅見 昌弘 落合 紗也夏 勝又 結衣 竹林 朱里	言語文化研究科教員 言語文化研究科言語文化専攻修士課程1年 グローバル学部 日本語コミュニケーション学科3年 グローバル学部 日本語コミュニケーション学科3年 グローバル学部 日本語コミュニケーション学科3年 グローバル学部 日本語コミュニケーション学科3年	日英二言語による共同作業を通した SDGs web雑誌の作成と発信 ～米国スミス大学とのテレコラボプロジェクト～	17. パートナーシップで 目標を達成しよう

2020年度 第3回

受賞内容	受賞者名	所　属	取り組み内容	SDGsアジェンダ
最優秀賞	齊藤 珠希 多田 健一 中居 奈々香 繆 昊辰 小笠原 七海 徐 茂霊 仁科 初音 矢田 萌子	工学部 環境システム学科3年 工学部 環境システム学科3年 工学部 環境システム学科3年 工学部 環境システム学科2年 工学部 環境システム学科2年 工学部 環境システム学科2年 工学部 環境システム学科2年 工学部 環境システム学科2年	大学屋上での養蜂活動による蜜蜂の保護及び生態系の重要性・都市の可能性の発信 Honeybee protection by beekeeping on the rooftop of the university and convey the importance of ecosystems and the potential of cities.	2. 飢餓をゼロに 11. 住み続けられるまちづくりを 12. つくる責任 つかう責任 13. 気候変動に具体的な対策を 15. 陸の豊かさも守ろう
優秀賞	藤浦 五月 岩崎 比奈子 藤本 かおる JC学科1年生	グローバル学部 日本語コミュニケーション学科教員 グローバル学部 日本語コミュニケーション学科教員 グローバル学部 日本語コミュニケーション学科教員 グローバル学部 日本語コミュニケーション学科1年	多摩六都科学館 × 武蔵野大学多文化共生プロジェクト	17. パートナーシップで目標を達成しよう
奨励賞	葛西 妃南 村山 史世 滝口 直樹 石井 雅章 松田 剛史 長岡 素彦 田中 優 畑 正夫	工学部 環境システム学科4年 武蔵野大学客員教授 武蔵野大学客員准教授 環境研究所客員研究員 環境研究所客員研究員 環境研究所客員研究員 環境研究所客員研究員 環境研究所客員研究員	SDGsのモノクロアイコンを活用して、持続可能な開発のためのゴールと未来のビジョンやアジェンダ（行動指針）を体験的かつ協働的に考える「オンラインSDGsワークショップ」を開発した。	4. 質の高い教育をみんなに
奨励賞	神山 綾音 秋間 奎哉 星 希望	人間科学部 社会福祉学科2年 人間科学部 社会福祉学科2年 人間科学部 社会福祉学科2年	児童養護施設及び乳児院への図書寄贈活動	1. 貧困をなくそう 4. 質の高い教育をみんなに

2021年度 第4回

受賞内容	受賞者名	所　属	取り組み内容	SDGsアジェンダ	共同応募者
最優秀賞	中板 育美	看護学部 看護学科教員	看護学生が中心となり、「健幸アンバサダー」として、包括的性教育に関する一般向けパンフレットを作成し、全国に発信	3. すべての人に健康と福祉を 5. ジェンダー平等を実現しよう	〈看護学科4年〉 沢島 唯子、荒井 美保、井上 未森、遠藤 綾乃、大矢 佳奈、岡野 日向子、荻原 舞織、小野寺 和奏、亀田 幸奈、河野 成美、坂田 琴菜、鈴木 愛澄、宗田 智菜未、外山 ひかり、中村 春月、新留 夏葵、原田 祐帆、古谷 優佳、真壁 美喜、増田 紫、森 綾香、上岡 まり亜、桑田 珠里、永井 佑依、平野 杏樹、水沼 秋歩、矢野 あやめ、渡邉 衣織、亀井 琴乃、木内 陽菜、二宮 愛深、松尾 紗希、石井 優希 〈看護学科教員〉 川南 公代、遠山 寛子、橋本 結花、田中 笑子、小山 千秋、廣瀬 絢加
優秀賞	藤田 颯斗	教育学部 教育学科3年	西東京市保谷公民館主催 人権講座の運営内容：子どもの権利を考える	10. 人や国の不平等をなくそう 11. 住み続けられるまちづくりを	他大学の仲間複数名
奨励賞	岡田 奈那美	人間科学部 社会福祉学科2年	武蔵野大学フェアトレードプロジェクト 株式会社エムユービジネスサポートご協力のもと、一般社団法人わかちあいプロジェクトから商品の仕入れをし大学の生協で1ヶ月間にわたりフェアトレード商品販売を行った。また、アンケート調査を実施し、学生のフェアトレードに対する関心度を高めた。	1. 貧困をなくそう 2. 飢餓をゼロに 4. 質の高い教育をみんなに 5. ジェンダー平等を実現しよう 8. 働きがいも経済成長も 12. つくる責任 つかう責任 13. 気候変動に具体的な対策を 16. 平和と公正をすべての人に 17. パートナーシップで目標を達成しよう	〈社会福祉学科2年〉 中村 颯真、内田 創太
奨励賞	加藤 慎策	工学部 環境システム学科3年	大学内の給水機導入による気候変動問題・プラスチックごみ問題に対する環境負荷削減と意識向上 Reduction and awareness of climate change and plastic waste problems by introducing watersupply machines in universities	4. 質の高い教育をみんなに 12. つくる責任 つかう責任 13. 気候変動に具体的な対策を 14. 海の豊かさを守ろう	〈環境システム学科4年〉 関 優太 〈環境システム学科3年〉 大濱 里菜

2022年度 第5回

受賞内容	受賞者名	所　属	取り組み内容	SDGsアジェンダ
最優秀賞	岡村 奈々	教育学部 教育学科3年	南アフリカの小学校に革命を ～ハタチの休学LIFE～	4. 質の高い教育をみんなに
優秀賞	黒木 咲良 高阿田 麻衣	教育学部 幼児教育学科3年 教育学部 幼児教育学科3年	子育て支援施設（武蔵野市立 0123吉祥寺）での 親子向けワークショップの企画・開催	3. すべての人に健康と福祉を
奨励賞	木之下 華菜	人間科学部 人間科学科1年	市販の生理用品を認知とアフォーダンスの観点から、具体的なデータをもとに色彩感覚とジェンダー規範がどのような関係を持つか調査を行った。	5. ジェンダー平等を実現しよう
奨励賞	広橋 莉子 他 看護学研究科1年 1名　看護学科2年 12名 看護学科4年 34名　看護学科1年 8名 看護学科3年 4名　看護学科教員 8名	看護学部 看護学科4年	看護学生が中心となり、「健幸アンバサダー」として、大学生の歯の健康に関する一般向けパンフレットを作成するとともに、既存のアンバサダー通信を用いて、大学祭や看護学科の授業で本学学生および学外者を対象に健康教育を実施、健幸情報を発信した。	3.すべての人に健康と福祉を 5. ジェンダー平等を実現しよう

2023年度 第6回

受賞内容	受賞者名	所　属	取り組み内容	SDGsアジェンダ
最優秀賞	渡邉 和 社地 美都 他 看護学科4年 29名　看護学科教員 8名 看護学科3年 1名	看護学部 看護学科4年	看護学生である自分たちが日常生活の中で感じるモヤモヤやよく聞く悩みごと、授業や実習の体験を通じて考えたことから、自分たち自身でパンフレットを作成し、それを日本中の健幸アンバサダーを通じて拡散するとともに、大学祭や授業、オープンキャンパス、学会などを通じて学内外の学生に健康教育を実施し若い世代を中心に幅広い世代や様々な地域に健幸情報を発信した。	3.すべての人に健康と福祉を 5.ジェンダー平等を実現しよう
優秀賞	岡村 奈々	教育学部 教育学科3年	アフリカでの経験をまとめた雑誌を出版し、 利益の一部をアフリカの小学校へ継続的に寄付	4. 質の高い教育をみんなに
奨励賞	阿部 拳太	アントレプレナーシップ学部 アントレプレナーシップ学科3年	山形県新庄市で毎年8月24～26日に開催される新庄まつりで使用された山車の廃材を活用し、小中学生向けワークショップを開催し、完成品で地域のお店を装飾することやハンドメイド商品として販売することで持続可能な伝統文化を実現	12. つくる責任 つかう責任
奨励賞	大瀧 隼平	工学部 環境システム学科2年	有明こども園での環境教育、それに向けた循環システムの導入 Environmental education at Ariake kindergarten and introduction of a circulation system for this purpose.	2. 飢餓をゼロに 4. 質の高い教育をみんなに 11. 住み続けられるまちづくりを 15. 陸の豊かさも守ろう 17. パートナーシップで目標を達成しよう

6-1 フィールド・スタディーズ実践例

フィールド・スタディーズ（以下「FS」）は、学生が大学の外に飛び出し、地方や世界が直面する課題に気づき、解決していくための想像力・実践力を養う取り組みである。

学生同士や受入先の方との深い交流を通して、新しい価値観を育み、視野を広げ、専門課程における目標設定や学びの動機付けを促している。

毎年、様々な目的・内容のFSが実施されており、中にはSDGsをテーマとするものも多くあることから、その活動内容をピックアップして紹介する。

PICK UP PROGRAM

01

共生社会フィールド・スタディーズ
身近なバリアを探る（東京）

02

鹿児島県 SDGs 未来都市「徳之島」
“豊かさ”溢れる島民の暮らし
エコツーリズム開発体験

03

那須甲子の森 SDGs 運動会
～自然の中で感じる、学ぶ、考える～

※活動内容は2024年度のものです。

PICK UP!
ピックアッププログラム

01 共生社会フィールド・スタディーズ 身近なバリアを探る（東京）

概要　開講型：国内通学型プログラム　期　間：短期

障がいの有無にかかわらず全ての人が共に生きる社会（インクルーシブ社会）の推進にむけ、私たちの周りにあるバリアを克服するために必要とされる視点や行動を学びます。本プログラムを通じて特に以下の3点を学修します。

① 障がい、あるいは身体的制約によって、私たちの身近に様々なバリアがあることを理解し実践する。
② 共生社会の実現に向けて、各自の専門でどのようなことができるのかを考え、今後の学修に活かす。
③ 立場の異なる人を尊重し、グループ活動を通じて主体性と協調性のいずれをも身につける。

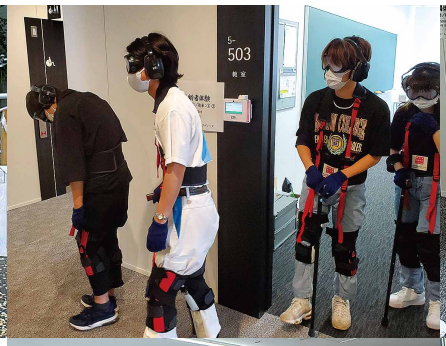
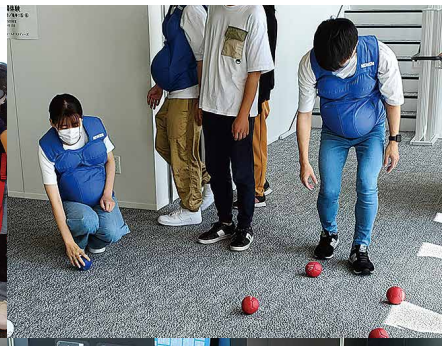
また、疑似的な身体的制約下での活動を体験します。これらを踏まえ江東区内の社会福祉法人の施設にて職場体験およびグループディスカッションを行いました。

参加した学生の声

- 講義の中で高齢者や障がいを持っている方の苦労を、身をもって感じることができた。机に向かってただ話を聞いているだけではなく、実際に体験する機会があったのはとても良かった。今回のFSのおかげで、バリアフリーやユニバーサルデザインに興味を持つようになった。
- 自分の学部について“現代社会に生きる学び”を考える機会になったのがとても良かった。
- 自分が学んでいる学問に通じる部分の学びが得られたのがまず良かった。グループで行動する機会が多かったが、色々な人の意見を汲み取れるように同じ学科が被らないような編成をしていたのも良い工夫だった。
- グループワークで初対面の人とのつながりができただけではなく、日に日に深めていけたことは自分の財産になったと思うし、街歩きの取り組みもとても有意義なものであった。

プログラム担当より

このプログラムの狙いの一つは、福祉を専門に学ぶ学生以外にも門戸を開き、より多くの学生にインクルーシブ社会への視野を広げて、自身の学びに活かしてもらいたい点にあります。そのため、講義や体験型など、個人の学修だけでなく、グループによる活動も大変重視しています。その工夫の一つがあらかじめ所属学部学科をシャッフルしたグループの作成と座席の指定です。偶発的にできたグループだからこそ、活動に必要な主体性や協調性を学ぶことができ、また異なる価値観や考えを持った者同士での交流を通じて新たな発見や自身に変化を感じ取ることができます。今まで見えなかったことが見えてくることで、自身の専門の学びにも役立つはずです。武蔵野大学が目指す「世界の幸せをカタチにする。」人材の第一歩がここにあります。

PICK UP!
ピックアッププログラム

02 鹿児島県SDGs未来都市「徳之島」“豊かさ”溢れる島民の暮らしエコツーリズム開発体験

概要　開講型：国内宿泊型プログラム　期　間：中期

さあ、シマの宝を見つける学びの旅へ！10人で挑んだ、シマの「宝」を見つけ、伝えるプロジェクト！ 2021年に世界自然遺産登録された徳之島の豊かな山・海。それらの自然と共にある島民の暮らし。自然や人に感謝する「文化」や、助け合いの精神である「ユイ」など自然と共に織りなされてきた人々の暮らしの中にはさまざまな“豊かさ”が存在しています。今回、本プログラムでは徳之島町下久志集落の生き方を体験的に取材、そのかけがえのない価値を言葉にすること、そしてそれが伝わるエコツアーの企画に挑戦しました。島民の皆様に多大なるご協力をいただき、各々のシマの「宝」を見つけた学生たちは、最後には自身がエコツアーガイドとなって、徳之島町の町長をはじめとする町の皆様と実際に島内を歩きながら発表することができました。また、徳之島の幸せ持続に貢献する商品開発プロジェクトにも挑戦しました。

参加した学生の声

- 水があるからこそ、山や海があり、生命の循環があって、今の私たちがあるということを学びました。「当たり前ではなく」「それがあるからこそ私がある」と常に考えて行動していこうと考えました。
- 最終的には自分たちの理想のエコツアーを完成できて、集落、役場の方もすごく良かった!と仰ってくださり、目標達成できました。私たちの班の準備が遅く、ギリギリまでかかってしまったのですが、相談に乗ってくださった集落の方々がいたからこそ、ここまでできたのだと思っています。
- 一番心に残った活動は下久志分校のキリンの色塗りと磯歩きです。集落という輪の中に入れてもらえた感じがして繋がりを感じ、嬉しかったです。
- たくさんの初めてを経験して、帰るのが寂しくてみんなで帰りの船で泣いて、留学した気分にもなれました。同じ日本でもこんなに暮らしが違うということも知れたし、たくさんの人と出会ったことで、視野も広がった気がします。

プログラム担当より

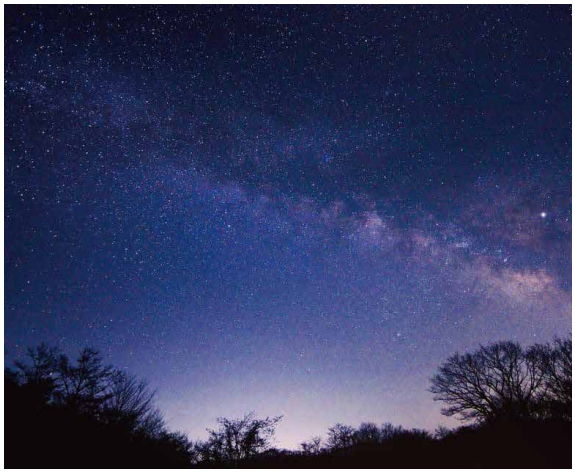
武蔵野大学の徳之島町との連携活動は今年度で11年目となりました。2021年度夏のオンラインプログラムを経てさらにパワーアップした本プログラムは、亀徳港で「おかえりなさい」と徳之島町役場の皆様に迎えていただいたところから始まりました。帰ってきた学生たちは「〇〇ができて良かった!」で終わるのではなく口を揃えて「それができたのは協力いただいた方のおかげです!ありがとうございました!」と報告してくれました。なぜできたのか、という部分まで考えることができているのは、徳之島の皆様が温かく学生たちを迎えてくださり、何度も何度も大切なことを教えてくださった賜物だと感じました。最後は涙の「いってきます」で徳之島を出発した学生たちは一回りも二回りも成長して帰ってきてくれました。

PICK UP!
ピックアッププログラム
03

那須甲子の森 SDGs 運動会
～自然の中で感じる、学ぶ、考える～

概要　開講型：国内宿泊型プログラム　期　間：短期

武蔵野大学看護学部生の提案から始まったこのプログラム。福島県那須甲子の森の自然の中でフィールド・ワークを行うことによって、自然の中で感じ、学び、考えるプログラムです。都会の生活の中で体験することのできない、自然からの学び。自然に触れ、ものつくりを体験しながら、SDGsや那須甲子の自然を感じることができます。国立那須甲子青少年自然の家を中心とし、周辺地域での森の散策やゴミ拾い、ナイトハイクや地域素材を駆使した染物やボタニカルキャンドルの作成等を通じて、SDGs学修および自然体験活動を実施します。最終発表では、那須甲子地域の魅力をそれぞれまとめ、動画形式にて発表します。



参加した学生の声

- 自分たちの少しの心がけや行動で、豊かな自然を守ることに貢献できるのだと実感しました。SDGsときくと、世界規模の大きな問題として捉えてしまいがちで、自分たちにできることはないのではないかと思ってしまうことがあるかもしれませんが、今回の体験から、ちょっとした行動の積み重ねでも、豊かな環境を守ることに貢献できるのだと知り、今後も自分たちにできることを意識して行動していきたいと思いました！
- 夜には森の中を散策して、きれいな星空を見ることができました。また、遠くから街の灯りを眺めると、こんなにもたくさんの電気を使用しているのだと目で見て実感しました。この体験からは、私たち一人一人が少しずつでも節電を心がけることで豊かな自然を守ることにつながるのではないかと考えました。
- コンビニや街頭、舗装された道等はなく、そういったものから離れることによって、享受していたもののありがたさ、生活の中で消費するものの多さ、そして何より自然本来の壮大さに気がつくことができました。

プログラム担当より

このプログラムは、学生が学生のためのプログラムを企画するイベントである「武蔵野大学 SDGs × 学外学修アワード」から生まれたプログラムです。SDGs関連のイベントに対する学生の思いと自然の中での体験・学修にかける教員や受入先の熱意が合わさり、2022年度に初実施を迎えることとなりました。学生たちは廃材利用のアート体験や飯盒炊飯等からモノの再利用やフードロスといった「無駄をなくすこと」について深く考え、自身でできるたくさんの小さな心がけを見つけていました。受入先の方も自然体験活動のプロフェッショナルで且つ学生とも距離が近く、どんな質問にも答えてくれます。世界が取り組むSDGsを自然に囲まれた環境で考え、学んでみませんか。

6-2 2024年度 フィールド・スタディーズ一覧

※SDGsのテーマと関連するものを一部抜粋。

	宿泊/通学/オンライン	プログラム名	海外/国内	期　間	担当教員（敬称略）	人数枠	概　要	関連する目標番号
1	宿泊	台湾入門 ～台湾を楽しみ、台湾を学ぶ～ (台湾)	海外	短期	片倉 佳史	30	台湾について学び、考える講座。現地の空気に触れ、台湾の魅力を全身で受け止めることを重視する一方、歴史や日台の結びつき、日台関係論など、複数の視点から台湾社会を見つめます。同時に、台湾について学ぶことで、冷静でかつ客観的な国際感覚を醸成し、見聞を広めることも目的とします。ゲストスピーカーも招聘し、台湾を取り囲む国際情勢、台湾に暮らす日本人の生き方、台湾人の戦争体験、台湾の社会事情など、盛りだくさんの内容を想定しています。講義は日本語で行います。中国語・台湾語の学修歴は問わず、語学能力も問いません。	10
2	宿泊	台湾スタディツアー：台北を歩き、人と話し、過去・現在・未来を考える (台湾)	海外	短期	藤田 賀久	30	台北をフィールドに台湾の過去・現在・未来を考えます。旧市街の復元や伝統文化、戒厳令時代の爪痕などを訪ね、複雑な過去に向き合い、未来を切り開こうとする台湾の今を実感することを目指します。皆さんの観察結果は、現地の大学で発表（英語 or 日本語）し、台湾人学生と交流を深めます。	5 11 16
3	宿泊	秋田県鹿角市 地域DMO体験 プロジェクト	国内	中長期	鈴木 純一	12	北東北の中心に位置する十和田八幡平国立公園に抱かれ、世界遺産1件、ユネスコ無形文化遺産3件を有する自然と伝統文化に恵まれた鹿角市において、本市の主力産業である観光産業に関する調査研究活動を通じて、地域の魅力を発信しながら観光客の増加に結びつけるための戦略的な地域活性化策について学びます。 ●ユネスコ無形文化遺産「花輪ばやし」に参加します。 お祭り好きの方歓迎です！（足袋と雪駄を支給します） ●宿泊施設では相部屋となります。 ●市内は自転車での移動を想定しています。	8 11
4	宿泊	はばたけ 秋田県 上小阿仁村！ ～人口1,958人の小さな村にある魅力を見つける～	国内	中長期	後藤 新	12	現地で見つける新しい魅力とは？ 村を元気にするお手伝い。お年寄りが多く、産まれてくる子供たちが少ない上小阿仁村で、地域住民との交流、保育園や小中学校での子どもたちとの交流、自然環境、食文化等を体験します。 その体験を通じて、上小阿仁村を今よりも活性化するためには、どのような取り組みをすればよいか考え、最後にはグループで発表します。	3 11 15
5	宿泊	福岡県大川市 モノ作りの 魅力発信 プロジェクト	国内	中長期	太田 裕通	4	国内有数の家具の生産地である福岡県大川市にて、自身のデザインによる家具作りをとおし、大川市のモノ作りや地方都市の魅力を学び、発信するプログラムとなっています。「大川のある暮らし」をテーマに自分の住まいにおいて、「あったらいいな」と思う家具をデザインしてください。世界に一つだけの、あなたと大川をつなぐ家具を作りましょう。 ●市内での移動は自転車となります。 ●自身でデザインした家具の送料は自己負担となります。	12

	宿泊/通学/オンライン	プログラム名	海外/国内	期　間	担当教員（敬称略）	人数枠	概　要	関連する目標番号
6	宿泊	鹿児島県 SDGs未来都市「徳之島」 “豊かさ” 溢れる 島民の暮らし エコツーリズム開発体験	国内	中長期	梅田 大輔	10	世界自然遺産に登録されている山や海、生き物、それらの自然と共に織りなされてきた徳之島の人々の暮らし。そこには独自の豊かな環境文化があります。しかし、離島という地理的な不利や、集落によっては高齢化、人口減少などの課題もあり、このままでは暮らしや文化の持続が難しくなる可能性もあります。2015年から連携し、武蔵野大生が様々なFS活動を行ってきた徳之島町で、今年度から「宝をつなぐ・宝をつくる」プロジェクトとして、島の幸せの持続に貢献する商品の開発を始めます。今年度は立ち上げの初年度であり、開発の進め方から手探りの活動となります。そのため、消費者的でなく生産者・開発者的態度、チームのメンバーや地域の方々と協働する姿勢を求めます。	11 14 15 17
7	宿泊	山梨県西桂町 福祉推進・地域活性化 プロジェクト	国内	短期	野口 友紀子 渡辺 裕一 櫻井 真一	12	人口約4,000人の小さな町・山梨県西桂町で、社会福祉の推進や地域活性化に向けて、町の人が大切にしているものを、共に学び、動画や写真等をSNS等で発信します。 事前学修で西桂町の基礎的なことを学びます。また8／15には西桂町を訪れ地元夏祭りへの参加、翌日はグループに分かれ、町内散策等で地域の方々と触れ合います。後日、西桂町職員の方からの講義や町の方々へのインタビューをオンラインで行い、活動最終日には再び西桂町を訪れ学外学修で学んだ成果を町の方々の前で発表します。	11
8	宿泊	北海道東川町役場 地方行政 フィールドワーク	国内	短期	安達 光樹	20	30年以上前から写真文化を核とした町づくりを進め全国的にも珍しく人口が増加し、全国の自治体から注目されている元気のある町で、数多くのユニークな施策に取り組んでいる行政の仕事を体験します。	11
9	宿泊	宮城県大崎市 世界農業遺産 大崎耕土 エコツアーから学ぶ 歴史探訪 サステイナブルな生き方	国内	短期	山田 均	40	何世代にもわたり継承されてきた伝統的な農林水産業とそれを取り巻く自然（生物多様性）と文化を、国際連合食糧農業機関（FAO）が世界農業遺産に認定した、大崎耕土でのエコツアーを体験することで、日本型SDGsのモデルとしてサステイナブルな生き方の一つを学び、エネルギーの自給にも挑戦している生活も体験し、近未来の持続可能な生き方の心地よさを実感する。	2 7 8 9 11 12 15
10	宿泊	山形県大石田町 「そばの里 大石田町の歴史と 文化・未来に向かって」	国内	短期	武田 憲明	32	大石田町の歴史と文化を学ぶとともに、観光資源である「そば」について、そばの歴史・伝統を学び、そば打ちを体験する。また、地元の窯元（次年子窯）での陶芸体験や虹の町案内人による町歩き、地域おこし協力隊の方による講義を受講。グループワークを通じて地域活性化につながる提案をまとめ、オンラインを通じて大石田町の方々に向けて発表を行う。	11
11	宿泊	那須甲子の森 SDGs運動会 ～自然の中で感じる、 学ぶ、考える～	国内	短期	真山 高士	30	武蔵野大学在学生からの提案から始まったこのプログラム。那須甲子の森の自然の中でフィールド・ワークを行うことによって、自然の中で感じ、学び、考えます。都会の生活の中で体験することのできない、自然からの学び。自然に触れ、ものつくりを体験しながら、SDGsや那須甲子の地域課題を考えます。	4 7 12 15 17

	宿泊/通学/オンライン	プログラム名	海外/国内	期　間	担当教員（敬称略）	人数枠	概　要	関連する目標番号
12	宿泊	「大自然のまちで国際交流！英語サマーキャンプ@長野県信濃町」	国内	短期	東郷 裕	6	大自然に魅了された外国人在住者が多い長野県信濃町で、英語を使って自然体験。馬のロッジで行われるキッズ向けサマーキャンプのアシスタント、パーマカルチャー&農業体験、森歩きなど。多文化に触れながら、外国人からみた日本の自然の魅力、自然とともに暮らすこと、持続可能な社会の実現のためのアプローチを学びます。	11
13	宿泊	長野県信濃町における地域産業の体験と課題発掘	国内	短期	内藤 文隆	48	実際に農業を体験し、地方産業やこれからの農業ビジネス、6次産業化などについて考えます。また、信濃町の産業、観光、環境などを調査し、課題や利用可能な町の資産を発掘して信濃町の地域活性化のための企画をチームで作り発表します。	11 15
14	宿泊	過疎地域の生活を豊かにする買い物支援体験～移動式スーパーと巡る森と湖の田舎町～	国内	短期	内藤 文隆	5	移動式スーパーとくし丸に同行し、自然豊かな信濃町の魅力に触れつつ買物弱者とされる高齢者等と交流することで、地域や住民が直面している地域課題から住み続けられるまちづくりや都市部・若者ができることなどについて考える。	11
15	宿泊	世界文化遺産富士山エコツアーから学ぶ自然共生サステイナブルな生き方	国内	短期	山田 均	44	富士山麓のキャンプ場を本拠地として世界遺産となっている富士山の自然、歴史、文化をエコツアーを体験することで学び、自治体、NGO、自然学校、農林業、観光業などを訪ね、可能な限り現場での運営側の体験の機会を得るようにする。 自然体験活動指導者の資格取得希望者には、本講座終了後に補習の機会を作り、資格取得を目指す。	6 7 8 13 15 17
16	宿泊	西東京市FSプログラム児童館キャンプ	国内	短期	水越 俊行	10	小学4年生～高校生の年代を対象とした、1泊2日の野外体験事業に、職員の補助として児童指導や生活のフォローを行います。キャンプ実施場所までは、大型バスに乗って子どもたちと向かいます。 ●1泊2日の宿泊体験中の参加者の生活や活動のフォロー（食事・入浴・就寝など） ●体験活動が円滑に行われるための参加者への声掛けやプログラムの運営補助 ●集団活動が難しい参加者の見守りなど	3
17	宿泊	震災でリセットさせられたまち課題を可能性へ変えるひとびと～君たちはどう生きるか?～（南相馬市）	国内	短期	東郷 裕	80	福島県南相馬市で震災復興に関連するプログラムを実施予定。ゼロからの街づくりについて、復興・創生に携わってきた現地産業に従事している方たちの話を聞き、得られた期待や今後の将来を考えるグループワーク等を予定。	7 8 9 11

	宿泊/通学/オンライン	プログラム名	海外/国内	期　間	担当教員（敬称略）	人数枠	概　要	関連する目標番号
18	通学	武蔵野市福祉公社 高齢者福祉支援 インターンシップ	国内	中長期	山田 均	2	武蔵野市福祉公社が運営する事業を体験するため、各部署を順に巡ります。 武蔵野市福祉公社のサービスを利用する高齢者と接する機会が多く、貴重なコミュニケーションの機会となります。福祉や介護の現場業務をとおして、様々な生活課題の解決を必要とする人への支援の実際を体験し、人が人を支える福祉の基礎を学ぶことができます。	3 11
19	通学	武蔵野千川福祉会 社会福祉施設 サポート インターンシップ	国内	中長期	本多 勇	8	主に知的障害のある成人の方への就労継続支援B型事業所または生活介護事業所と、主に知的障害のある児童・生徒の放課後等デイサービス事業所で活動します。 就労継続支援B型事業所においては、封入・封緘作業の支援・補助を行います。生活介護事業所においては、封入・封緘作業の支援・補助の他にアート活動の支援・補助なども行います。放課後等デイサービス事業においては、買い物・アート・運動などの活動支援・補助をします。 活動場所は武蔵野市内です。 実習先：① ななほしワークス、② ワークイン関前、 ③ 八幡作業所、④ ワークイン中町、⑤ 千川さくらんぼクラブ	3
20	通学	小金井市観光 まちおこし協会 インターンシップ （まちと遊びまちから学ぶ インターンシップ）	国内	中長期	渡辺 幸之助	2	まちの観光資源や地域の魅力発信の取り組みについて学習し、商店街や公共施設のイベントの体験実習を行うことで、まちの楽しい人々と交流し地域活動を体験します。	11
21	通学	小金井市 貫井北センター （NPO法人 市民の図書館・ 公民館こがねい） インターンシップ	国内	中長期	渡辺 幸之助	2	図書館・公民館でのインターンシップです。日常業務やイベントの運営補助を行います。NPOだからこそできる運営を体験します。 実習日はセンターが実施するイベント等により土日に活動する場合もあります。夏季休業中は本プログラムに優先的に参加できる学生を募集します。	11
22	通学	小金井市 地域の寄り合い所 また明日	国内	中長期	渡辺 幸之助	4	赤ちゃんからお年寄りまで、小中高生や地域の人も立ち寄る「また明日」にて地域の人々と交流します。乳幼児のお世話や、小中学生の話し相手、勉強の見守り、また、高齢者に寄り添いながらサポート業務を行います。	8
23	通学	西東京市役所 FSプログラム （サマー子ども教室）	国内	中長期	水越 俊行	5	実施小学校全児童を対象に、夏休みの居場所作りとしてカリキュラムを組み、体験学習を中心に1クール約20人の教室形式で工作・クッキング・企業の出前講座などの指導補助を行います。また、学生立案による企画事業や児童指導全般の指導なども予定しています。また、サマー子ども教室の実施がない日は、市内児童館もしくは学童クラブで、児童指導補助として子どもたちの活動を援助する実習を行います。	3

	宿泊/通学/オンライン	プログラム名	海外/国内	期　間	担当教員（敬称略）	人数枠	概　要	関連する目標番号
24	通学	西東京市役所 FSプログラム （児童館ランチタイム）	国内	中長期	水越 俊行	27	西東京市内の児童館では、夏休み期間、家庭での孤食防止や居場所としてランチタイムを設けています。その児童館で夏休みを過ごす子どもへの指導を行ってもらいます。 実習施設追加に伴い人数枠を18名から27名に増員しました。	3
25	通学	【建築デザイン学科限定】 大成建設 体験してみよう！ 「地図に残る仕事。」	国内	中長期	水谷 俊博	2	【建築デザイン学科限定】 建築作業所で、現場管理業務の流れを学修します。工事計画を基に実際に建物が建てられていくダイナミックな過程を、ぜひ体験してください。 国内最大手のゼネコンである大成建設の都内の工事現場において様々な取り組みを見学・体験します。現場担当者の指導の下、毎朝朝礼とラジオ体操から始まり、コンクリート打設見学、タワークレーン見学、配筋見学などを行うことになります。様々な職能を有する専門家集団が活動する建設工事現場での業務は、モノづくりを実体験でき、多くの気づきや智恵となります。	11
26	通学	Field Study in English（FSiE）	国内	短期	黒木 達雄	70	This is a course designed for your independent study at off-campus. You need to participate in five off-campus events (including online events) such as seminars, symposiums, exhibitions and so forth, all conducted in English, and then submit your reflection report within two weeks after each event.	9
27	通学	TOKYO GLOBAL GATEWAY 体験型英語学習 ＋途上国社会 問題解決 フィールド・スタディー	国内	短期	黒木 達雄	40	東京お台場にある英語体験型施設「TOKYO GLOBAL GATEWAY」で1日コースのプログラムを体験します。イングリッシュスピーカーとの会話を通じて、英語でのコミュニケーション力と異文化理解力を強化します。 その後、途上国の社会課題について理解を深め、解決策の創出に挑戦することを目的としたフィールド・スタディーを対面で3日間実施します。（途上国へのインタビューのみオンラインとなります。）途上国の課題をチームで考え、解決策を提案します。	1 2 3 4 6 7 8
28	通学	東京臨海副都心 まちの景観づくり活動 （花壇管理・クリーン活動）	国内	短期	伊尾木 慶子	400	**「まちの景観」を構成する植栽の維持管理活動** 都立公園で実施されている「花と緑のおもてなしプロジェクト」に参加し、活動をとおして「まちの景観づくり」に貢献するとともに、社会人との交流体験により個々のキャリア向上を図ります。また東京臨海部の成り立ちを理解する為TOKYOミナトリエの見学と臨海部の現地調査を行いレポートを提出します。 同時に自身が景観について関心のあるテーマを設定し4箇所を訪問したレポートを提出します。 活動場所：有明・台場地区	11
29	通学	作陶における 伝統の創造	国内	短期	菅原 克也	40	陶芸家の伊藤麻沙人先生にご指導いただきながら、陶器を製作します。伊藤先生の工房で撮影した動画によって制作の手順を学び、各自自宅で陶土を捏ね、形を作り、施釉（せゆう）の段階では伊藤先生の工房に伺って作業を行います。オンラインで行う事前・事後授業では、陶磁器史、陶芸にまつわる文化、陶芸における化学などについて学びます。 この体験と講義を通じて、自分自身の手でものを作り出す喜びと、陶磁器に関わる人間の営みの歴史や陶磁器が生まれる原理などを知ることができます。それは私たちの身の回りにある様々なもののなかから本物を見分ける力を養うことにつなげていきます。	12 15

	宿泊/通学/オンライン	プログラム名	海外/国内	期　間	担当教員（敬称略）	人数枠	概　要	関連する目標番号
30	通学	【法律学科優先】 武蔵野地区 空き家等状況調査 （西東京市）	国内	短期	竹之内 一幸	6	西東京市の空き家等の状況調査を行います。市内をいくつかのエリアに分け、エリアごとに空き家等の現地調査を実施し、地域の課題を含め、現況報告書を作成します。また、現況調査の結果を踏まえ、空き家問題に対する予防や利活用について提案を行います。 本プログラムは空き家に関する法規を取扱う機会が多いため法律学科の学生を優先としますが、他学科でも興味関心があれば応募してください。	11
31	通学	共生社会 フィールド・スタディーズ 身近なバリアを探る （東京）	国内	短期	神吉 宇一	40	障害の有無にかかわらず全ての人が共に生きる社会（インクルーシブ社会）の推進にむけて、学外に足を運びながら、私たちの身近にあるバリアを理解し、そのバリアを克服するために必要とされる視点や行動を学びます。 まちなかのバリアを体感できるように身体的制約の擬似体験（「車椅子」「高齢者」「視覚障がい」「妊婦」）を有明キャンパスで行います（株式会社ミライロ協力） また江東区内および他のエリアでの社会福祉法人職場体験を行います。	3
32	通学	マレーシア・ ボルネオ島の 自然保全を学ぶ	国内	短期	伊尾木 慶子	30	マレーシア・ボルネオ島の自然や野生生物の保全について現地の専門家によるオンライン講義（日本語通訳含む）を通じて学ぶ。また、都内植物園を訪れ、実際に熱帯林に生息する植物や動物について見学する。現地の人々の暮らしと熱帯林の関わりについても地域研究の専門家を招いて伺い、ディスカッションを行う。	15
33	通学	東京都八王子市 北原病院グループ 知恵と癒しの医療を学ぶ ～One health & Small is beautiful	国内	短期	山本 摂子	24	地域で脳卒中医療に取り組んでいる現場に赴き、講義・見学・体験・グループワークを通して、知恵と癒しの医療を学ぶプログラムです。東京都八王子市北原病院グループの施設および専門職介入の見学、ヒーリングファシリティや地域連携の実際等から、自分の五感と心で感じて学びます。	1 11 17
34	通学	【中野区よもぎ塾】 無料塾での活動を通して 考える教育	国内	短期	間中 和歌江	10	中学生を対象とした無料塾で学習指導を行う。指導科目は主に、英語、数学、社会、国語、理科等。有料の塾での指導に比べ、生徒たちのサポーターとして、学習指導以外にも細かい心配りが必要となる。SDGsの第4の目標を念頭に置きつつ、生徒との対話、交流の中から、教育の機会均等や「質の高い教育」とは何かについて考える。	4
35	オンライン	きらめく仏塔の国々	海外	短期	高田 知仁	60	仏教美術の成立について、特にインド・東南アジアを中心に全体の流れを学ぶ。その中でタイの仏教美術がどのように形作られてきたのかを、時間軸と地域性を見ながら総合的に理解を進めることを目指す。タイの仏教美術を理解するために、仏教美術が伝わった道筋とその変遷をたどり、理解を進めるために美術史の考え方を学び、実際に仏教美術の作品を観察し、その意味や様式などを学習者自身が判断できるようにする。	11

6-3 武蔵野大学学外学修アワード
～SDGs×学外学修の新しいカタチとは？～

フィールド・スタディーズ（FS）において、これまでにない新しい学外学修のカタチを生み出し、学修者本位のプログラムを構築するため、学生からFSのアイデアを募集する「武蔵野大学学外学修アワード」を開催している。

SDGsの観点も考慮された、今後の社会に求められる新しい学外学修の在り方が毎年多数提案されている。その選考の結果を紹介する。

応募要件

応　募　資　格　本学の全学部生（個人またはチーム（3人以内））

提　出　テ　ー　マ　新しいプログラム案は以下のテーマを選択する。
その際、響学スパイラル*を意識したうえでプログラム案を作成すること。
A.「世界の幸せをカタチにするFS」（実習先や活動内容は自由）
B.「我が街の幸せをカタチにするFS」（自身の故郷や地元に特化した内容）

＊響学スパイラルとは：4つのステップ「問う」⇒「考動する」⇒「カタチにする」⇒「見つめ直す」という一連の活動を繰り返すことで互いに学び合い、高め合っていくという、本学独自の学修スタイル。

応　募　方　法　応募書類：① 自身の考えたFSアイデアの要約（A4サイズ 1枚）
② プレゼン用PPTスライド（最低5枚以上）

選考結果

2020年度 第1回

受賞内容	タイトル	関連SDGs目標番号
最優秀賞	オンライン時代に沿った実地での学修にとらわれず 誰も取り残すことのない、新しい学外学修のスタイルとは?	4 17 SDGs目標番号を軸としたディスカッションを行うため、全項目でディスカッションを行うことが可能。
優秀賞	みんなでつくるふるさとFS	
特別賞	SDGs運動会	17項目のうち、それぞれの内容に沿ったプログラムを一から企画・運営
特別賞	海の豊かさを守るFSの提案	14 15

2021年度 第2回

受賞内容	タイトル	関連SDGs目標番号
最優秀賞	SDGs3 全ての人に健康と福祉を #共生を考える会	3
優秀賞	『SDGs』を知る×感じる×考える ～北欧から学び、有明で体験し、自分たちで造り出す～	
特別賞	はちじょうじ『まるごと』 （短期八丈島フィールド・スタディーズ）	3
特別賞	人間のエゴを殺処分から考えよう	3

2022年度 第3回

受賞内容	タイトル	関連SDGs目標番号
最優秀賞	徳島県海陽町 道の駅宍喰温泉を拠点とした超実践 FS	8 9 11
優秀賞	原宿の「静」と「動」 ～ 魅せる街「原宿」の魅力を探る ～	
特別賞	～武蔵野大学留学生の特別交流文化 ― 留学生は先生になる ～	17
特別賞	サステナブルツアー in 下川町	
特別賞	SDGsを感じる旅 in 那須高原	2 3 10 11 12 13 14 15 17

2023年度 第4回

受賞内容	タイトル	関連SDGs目標番号
最優秀賞	西東京市との協働活動! 子どもたちの居場所を追求する超実践FS	4 10 16
優秀賞	山村で夏を過ごさん?	7 9 11 12 13 15
特別賞	越前和紙の里での紙すき体験	12 13
特別賞	MARCHE STORE OPENING PROGRAM	4 11 15

2024年度 第5回

受賞内容	タイトル	関連SDGs目標番号
最優秀賞	カンボジア・プノンペン フィールドスタディーズ	
優秀賞	超実践型！ 海外起業実践プログラム カンボジアで9日間のビジネスキャンプ	
特別賞	アートをキャンパス内に展示しよう We are art ツアー	
特別賞	ASEAN GDP成長率NO.1のフィリピンをビジネスの側面から体感する 1週間のフィールドスタディー	
特別賞	足立区綾瀬で行う実践FS ～ 綾瀬と学生のきっかけとなるように～	11 17

7 武蔵野大学しあわせ研究所

設立の背景と目的

本学は、建学の精神に基づく新ブランド "Creating Peace & Happiness for the world" を定め、本格的に「世界の幸せをカタチにする。」研究・教育を具現化する取り組みを開始した。これをさらに推進し、現代世界における克服すべき諸課題の解決を目指し、「世界の幸せ」を発見し創出するために、全学の叡智を結集したMusashino University Creating Happiness Incubation（武蔵野大学しあわせ研究所）を設立した。本研究所を拠点として、教員・職員・学生それぞれが所属する専門や単位を超えて交流し、さらに、相関する国内外の研究組織及び研究者との連携を深め、既存の枠組みにとらわれることのない新機軸の学際的なしあわせ研究・教育を構想し、その実現を目指す。

設　立　年　2016年

活動と研究員　一人ひとりの研究員が自分の専門領域を生かして実現し得る"幸せ像"を研究するとともに、分野横断的な共同研究を推進する。

将来的には関係大学や研究機関をはじめ、海外の協定校などとの共同研究を進め、世界の幸せ研究に関する成果のデータベースの蓄積・公開を目指している。

研究員構成　研究員：146名
客員研究員：111名　（2024年度）

2024年度研究テーマ一覧

氏　名	所　属	テーマ	共同研究者	共同研究者所属
渡辺 英雄	教育学科	海外留学において渡航者の安全をどのように確保するか	柴田 勝来 林 佳祐	モナッシュ大学（オーストラリア） ヴィッセル神戸
山本 摂子	看護学科	学科横断 'むさしのIPE' がめざす世界のしあわせ 「SDGs Goal 3：すべての人に健康と福祉を」	舘 祥平 長沼 幸司 小俣 智子 畠山 恵 志磨村 早紀 高尾 良洋 益戸 智香子 堀井 剛史 後藤 優子 三觜 久美子 嶋田 真理子 栃原 綾	看護学科 看護学科 社会福祉学科 人間科学科 人間科学科 薬学科 薬学科 薬学科 医療法人社団 碧水会 長谷川病院 医療法人徳洲会 湘南藤沢徳洲会病院 人間科学科 看護学科
時弘 哲治	数理工学科	数理工学的手法による 高楠順次郎先生の著作の統計解析	上山 大信 佐々木 多希子 松木平 淳太	数理工学科 数理工学科 龍谷大学 先端理工学部

氏　名	所　属	テーマ	共同研究者	共同研究者所属
小髙 真美	社会福祉学科	高等教育機関における自殺予防教育に関する 国際比較研究	川島 大輔	中京大学心理学部
富岡 優理恵	看護学科	看護学生を臨地実習における セクシュアルハラスメントから守るための戦略 ― 全国看護系大学への悉皆調査より ―	青木 恭子 坂上 明子 藍畑 麻美 林 はるみ	看護学科 看護学科 埼玉県立大学 保健医療福祉学部 看護学科 群馬大学ダイバーシティ推進センター
廣瀬 裕之	教育学科	中国仏教の日本への受容 ― 薬師寺東塔擦銘の 銘文研究(その3)と仏足石に関する調査 ―	漆原 徹 遠藤 祐介	教養教育部会 教養教育部会
大澤 侑一	看護学科	認知症の人を含む共生社会の実現に向けて ― 若年性認知症に着目して ―	清水 なつ美 永田 文子 伊東 真理 近藤 絵美 齋藤 多恵子	看護学科 淑徳大学 看護栄養学部 看護学科 東京医療保健大学 千葉看護学部 看護学科 日本赤十字豊田看護大学 看護学部 日本医科大学千葉北総病院
高牧 恵里	幼児教育学科	子どものリトミックを通しての表現活動に関する研究 ― リトミック活動の身体的影響について ―	松井 いずみ 荒金 幸子	明星大学 教育学部 特任准教授 上野学園短期大学 千葉経済大学短期大学部 非常勤講師
神吉 宇一	日本語 コミュニケーション 学科	インクルーシブな社会を実現するための 対話の場の創出に関する実践的研究(2) (Inclusive Campus / Community Project：ICP) ― 障がい者・外国籍者等マイノリティの 社会参加の実現に向けて ―	明石 修 上野 まき子 オーリ リチャ 木下 大生 清水 潤子 友田 奈津美 渡辺 裕一	サステナビリティ学科 京都橘大学 非常勤講師 グローバルコミュニケーション学科 社会福祉学科 社会福祉学科 おあしす福祉会 社会福祉学科
三浦 裕子	日本文学文化学科	幸せをカタチにするための基礎となる 心身の健康の維持・延伸に関する研究 ― 伝統芸能の活用および健康教育の普及 ―	大室 弘美 岡 卓志 森田 ゆい	本学客員教授 しあわせ研究所客員研究員 東京立正短期大学 准教授
佐俣 紀仁	法律学科	国際協力ボランティア活動を通じた SDGs教育・法学教育の実践	富田 育磨	北タイ・アグロフォレストリー・センター
三坂 育正	サステナビリティ学科	快適な屋外空間創出に向けた暑熱環境適応空間の計画手法に 関する研究 ～商業施設・空間を対象とした暑熱環境に関する調査～	―	―
佐々木 多希子	数理工学科	自然言語処理を用いた保育士の感情分析	小川 房子	幼児教育学科
木下 大生	社会福祉学科	障害者、社会的マイノリティーの人々の雇用促進の システムと安心して働ける環境の構築に関する研究 ― 他大学の取り組みからの検討	神吉 宇一 明石 修 柳 延希 坪田 明子 中津 真美 金子 毅司	日本語コミュニケーション学科 サステナビリティ学科 社会福祉学科 看護学科 東京大学 バリアフリー支援室 特任助教 日本福祉大学福祉経営学部 医療・福祉マネジメント学科 助教
小川 房子	幼児教育学科	保育場面と心情の読み取りにおける多様性の要因と保育者の同僚性の 構築を目指す試み2 ― 園内研修における相互理解を手掛かりに ―	石田 由紀子 兼間 和美	しあわせ研究所客員研究員 徳島県保育士・保育所等支援センター 保育相談員
福沢 愛	人間科学科	日本人高齢者におけるSubjective well-beingと 社会関係資本の関連に関するメタ分析	中川 威 竹内 真純 Sala Giovanni	大阪大学 東京都健康長寿医療センター研究所 University of Liverpool
白井 信雄	サステナビリティ学科	持続可能な地域づくりを担う 統合転換コーディネイターの プラットフォームの構築と運用・評価	増原 直樹 松本 明 麻生 智嗣 東 健二郎 小澤 はる奈 本間 早也香	兵庫県立大学 環境人間学部 准教授 高知大学 地域協働学部 准教授 合同会社サスティナブル・デザイン都市戦略研究所 一般社団法人 コード・フォー・ジャパン Decidim担当 持続可能な地域創造ネットワーク 事務局 株式会社エックス都市研究所 研究員
Ohri Richa	グローバル コミュニケーション学科	多様でインクルーシブな日本社会へ ― Be the Changeプロジェクト ―	神吉 宇一 後藤 七海 島田 徳子	日本語コミュニケーション学科 TMI総合法律事務所 グローバルコミュニケーション学科
坂上 明子	看護学科	動画を活用したプレコンセプションケア授業： 教育効果の検証	青木 恭子 富岡 優理恵 藍畑 麻美	看護学科 看護学科 埼玉県立大学 保健医療福祉学部 看護学科
張 巧韵	グローバルビジネス学科	Indulge or not Indulge	許 佑旭	明治大学 専門職大学院グローバル・ビジネス研究科
森 竜樹	数理工学科	ホテルの宿泊部屋の稼働率予測のための 数理モデルの構築と評価	中村 圭一	株式会社ワールド・ヘリテイジ

氏　名	所　属	テーマ	共同研究者	共同研究者所属
田中 笑子	看護学科	ヘルスプロモーション実習を通じた アクティブラーニングによる学び	中板 育美 橋本 結花 山本 摂子 舘 祥平 青木 恭子 古屋 千晶 小熊 亜希子 清水 なつ美 小林 幹紘 長沼 幸司 土志田 敬祐	看護学科 看護学科 看護学科 看護学科 看護学科 看護学科 看護学科 看護学科 看護学科 看護学科 株式会社タニタヘルスリンク
北 義子	人間科学科	言語聴覚障害児者の地域支援と 社会のアドボカシーの醸成にむけて	畠山 恵 上間 清司 小杉 裕子 志磨村 早紀 西村 雅史 氏田 直子 小森谷 晴代 藤木 和子 中津 真美 小林 順子 鐙 重美 小林 美穂 菅原 充範 藤田 芝圭美 伊藤 泰子 伊藤 敬市 高橋 美夏 眞野 守之 蒲生 貴行	人間科学科 人間科学科 人間科学科 人間科学科 愛知産業大学 造形学部スマートデザイン学科 学科長・教授 静岡大学 情報学部 特任教授・名誉教授 医療法人社団北條会 きこえとコミュニケーションのうさぎクラブ(言語聴覚士) 全国難聴児親の会 会長 SODAの会代表（弁護士） 東京大学 バリアフリー支援室 国際医療福祉大学クリニック 言語聴覚センター 小児精神衛生相談室、 栃木県カウンセリングセンター 横浜市東部地域療育センター、臨床の知を考える会 代表(言語聴覚士) 医療法人社団北條会 きこえとコミュニケーションのうさぎクラブ(言語聴覚士) 東京都立立川学園 聴覚障害教育部門 乳幼児教育相談 教諭 筑波ろう学校 言語聴覚士 きこえとコミュニケーションのうさぎクラブ(言語聴覚士) 医療法人 徳洲会武蔵野徳洲会病院、NPO法人どこでもことばドア 株式会社PND訪問看護ステーションぱんだ、 株式会社beこぱんはうすさくら さいたま中浦和教室 特定非営利活動法人 人工聴覚情報学会 代表理事 公益財団法人 テクノエイド協会(言語聴覚士)
白鳥 和彦	サステナビリティ学科	世界のしあわせを共創するプロセスデザイン － SDGs SurveyとLWCによる Think Globally, Act Locallyを実現する市民生活教育の研究	薄羽 美江	株式会社エムシープラニング
髙橋 和枝	サステナビリティ学科	フェアトレードキャンパスグッズの研究 ーバナナペーパーを使った製品の環境影響評価と製品企画ー	エクベリ 聡子	ワンプラネットカフェ
門多 真理子	サステナビリティ学科	プラスチックを食する昆虫の幼虫の消化や 吸収に働く遺伝子の解明その3(最終)	志波 優	東京農業大学 生命科学部 分子微生物学科 准教授
清水 潤子	社会福祉学科	市民活動領域における評価手法の多様性 ― 価値論のパラダイムに着目して ―	津崎 たから 中谷 美南子	ウエスタン・ミシガン大学大学院学際的評価学博士課程 評価コンサルタント
明石 修	サステナビリティ学科	武蔵野大学サステナブルキャンパスプロジェクト	鈴木 菜央 白井 信雄 田中 笑子 山本 摂子 木下 大生 箕輪 潤子 今福 理博 山田 博	サステナビリティ学科 サステナビリティ学科 看護学科 看護学科 社会福祉学科 幼児教育学科 幼児教育学科 ウェルビーイング学科
中板 育美	看護学科	むさしの健幸アンバサダーによる Health for All： 産官学民共創ヘルスリテラシー向上の取り組み	遠山 寛子 佐藤 睦子 明石 修 峰 友紗 橋本 結花 山本 摂子 田中 笑子 渡邉 千秋 廣瀬 絢加 塚尾 晶子 土屋 厚子	看護学科 看護学科 サステナビリティ学科 幼児教育学科 看護学科 看護学科 看護学科 看護学科 看護学科 スマートウエルネスコミュニティ協議会(つくばウエルネスリサーチ) スマートウエルネスコミュニティ協議会(浜松医科大学)
小野 健太郎	教育学科	多様な参画者を活用した 教科担任制カリキュラムの開発	三井 寿哉	東京学芸大学附属小金井小学校
高石 武史	数理工学科	FreeFEMでの開発と利用 ― 情報の収集・発信と研究交流		
磯部 孝行	サステナビリティ学科	資源循環に寄与する学内分別回収に関する研究	髙橋　和枝	サステナビリティ学科
藤本 かおる	日本語 コミュニケーション学科	深い対話を引き出す国際交流の場としてのVR空間の活用 －外国語学習を通してしあわせをカタチにするワークショップを行う場として－	小玉 博昭 村田マルゲティッチ 恵美	香港大学 現代言語及文化学院 ザグレブ大学哲学部インド極東学科日本学コース
飯田 和也	教育学科	全国の教室で実施可能な バーチャル富士山地学教材の開発と評価	福之上 嘉刀	東京学芸大学附属国際中等教育学校

おわりに

武蔵野大学では、西本 照真学長が2019年に「武蔵野大学SDGs実行宣言」を発表して以来、学内の様々な部門において、SDGsの推進を目的とする教育研究活動を積極的に展開してまいりました。本白書はその成果を広く皆様に知っていただきたく編集されたものです。この活動にご協力くださいました地域や産業界の皆様、学生のために学びの機会を熱心に創出してくださった教職員の皆様には、改めて御礼を申し上げます。

本学は、2024年に創立100周年という節目の時を迎えました。2024年は、まさに、気候変動やマイクロプラスチックの問題が顕在化し、一方で世界の政治は大きく動き、戦争が続き、SDGsが、遠い将来でなく、今の私たちの直面する課題であることを突き付けられた年でした。SDGsの学びに参加した学生たちは、この先の予測不可能な時代を生きていかねばなりません。SDGsは、彼らにとって、自分自身の差し迫った問題です。問題を知り、考え、行動する鍛錬を積んだ学生たちが、今後もそれぞれの視点や専門領域から、持続可能な未来の創造に貢献してくれることを願っています。

すでに白書の中で語られておりますとおり、武蔵野大学の建学の精神は、SDGsの基本理念と深くつながっています。武蔵野大学はこれからも、「 世界の幸せをカタチにする。」 ための歩みを進めてまいります。

改めまして、西本学長が推進してこられた取り組みに敬意を表するとともに、2025年度からは次期学長としてその意思を引き継ぎ、本学におけるSDGsの推進に尽力していく次第です。この白書を手に取って読んでくださった皆様、自分の活動を振り返られた皆様に、さらなるご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

2025年3月
武蔵野大学
副学長　小西 聖子

世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World

Musashino University
武蔵野大学

武蔵野大学SDGs活動白書
2019-2024

2025年3月発行

企画　武蔵野大学 未来響創計画推進小委員会

編集　武蔵野大学 教育企画課

〒135-8181 東京都江東区有明三丁目3番3号